
バカとテストと落とし神

ネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと落とし神

【Nコード】

N7955V

【作者名】

ネコ

【あらすじ】

僕は観察処分者で幽霊憑き！？しかもその幽霊はギャルゲーの神様、落とし神！？一体、僕の生活はどうなるのさーっ！

FLAG 0 序章（前書き）

完全に中の人つながりです。

中の人と同じ作品で書いてみたかったです。

FLAG 0 序章

「待ってください、にーさまーっ！」

後ろから、エルシイの声があるが、今はそれどころじゃない。
この分岐、どちらに行くべきか。

.....、
よし、エンディングが見えた！

これでこのゲームも終わりか。

しかし、意外と良い話だったな。ここのゲーム会社、今度チエツクしておこう。

「にーさま、ちゃんと前見て歩かないと、危ないですよ」

「大丈夫だよ。現実リアルごときがこの僕を殺すなんて事は不可能だ！」

僕は真ゲームの世界の神。

現実リアルなんか干渉される謂われはない！

「いや、現実で死んだら、いくら神にーさまだって終わりですよくっ！」

確かにエルシイの言う通りか。それがなければ、面倒な事駆け魂狩りも無

視できるのに。

これだから現実リアルはー！！

「あれ？何でしょう、アレ？」

ん？ 何だアレ？

道端に何かが落ちている。微妙に光ってて眩しいんだが。

「鏡、ですかね？」

「みたいだな」

無駄に装飾が派手だな。

鏡のまわりを天使みたいなのが飛んでいて、いかにも高級品です、みたいな雰囲気漂ってるが、道路に落ちて、汚れたおかげで見事に台無しになってるな。

……まっ、どうでもいいか。こんな鏡ごとき。その内、だれかがゴミ箱にでも持っていくさ。

「変な鏡ですねー。これ、どうします……って、置いて行かないでくださいー！」

こいつも誰か拾ってくれないだろうか……。

吹き抜けるような青空。そんな中に漂う白い雲。そして、人が誰一人いない静かな場所。

屋上。

そう。ここはまさしく、

「僕がギャルゲーをするためにあるような場所じゃないか！」

今はエルシイもない。

さっき、図書館に新しい消防車の本を借りて来ます、とか言うてたからな。

「ふはははははははははは！！」

僕は一心不乱にゲームをする。

今日中に五本は終わらせる予定なんだ。悠長にやっている暇はない。

『ピロリロリン メールだよ』

今、良い所なんだが。一体誰だ？

僕はメールを開いて、

一
氣に押し寄せてきた光の波に吞まれ、意識を失った。

FLAG 0 序章（後書き）

また新しく書いてしまい、僕は何をやっているんでしょうか？
今までの分もまだまだなのに、こんな事をして大丈夫なのか不安で
ありますが、頑張ってみます。
ただ、やっぱり更新は遅くなるかも。

FLAG 5 生物

問 以下の問に答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

桂木桂馬の答え

『?ギャルゲー ?ゲームハード ?ヒロイン ?ストーリー
?ゲーム製作会社』

教師のコメント

見事なまでのダメ人間っぷりですね。……というか、君は誰です
か？

FLAG 1 / 0 幽霊になってもゲームを

「吉井、遅刻だぞ」

校門の前でドスのきいた声に呼び止められる。声のした方を見ると、生活指導担当の鬼教師である鉄人

「今、俺の事を鉄人と呼ばなかったか？」

じゃなくて、西村先生が立っていた。

なぜ、今、心の中を読まれたんだろうか？ とりあえず、ここは目をつけられない為にも、挨拶をしておいた方が良さだろう。

「やだなあ、気のせいですよ。鉄村先生、おはようございまグおア
あああっ!？」

何だ!？ なんで朝っぱらから、僕はアイアンクローをされているんだ!？

はっ！ まさか、鉄人。危篤なのか、頭が。

「この学校に 鉄村 なんて名前の人は一人もいないはずだがなあ、吉井」

「そ、それはさっき先生が鉄人っていう言葉を出したから、混ぜっただけなんです!！」

必死に説得してなんとか解放される僕。

ちよつと言い間違えただけなのに、ここまでするなんて、なんて教師だ。

いつか絶対に復讐してやる。

「まったく、お前というやつはいつもいつも。ほら、受け取れ」

先生が宛て名の欄に大きく 吉井明久 と、僕の名前が書かれた封筒を箱から取り出して渡してくる。

「あ、どーもです」

一応頭を下げながら受け取る。

今は春。

春休みが終わり、新年度の始まりの日だ。

そして、この封筒には、どのクラスに所属するかが書いてある。僕が通うここ文月学園ではクラスが成績順に、AからFまでの六つのクラスに振り分けられる。すなわち、成績の良い者はAクラスに、成績の悪い者はFクラスに所属する事になる。

別にAクラスがいいとは言わないが、Fクラスだけは避けたい。

いるだけでバカ認定されてしまう。それは男のプライドが許さない。「吉井、今だから言うがな」

「はい、何ですか？」

封筒がうまく開かない。もう少し、抑え目に糊づけしてくれればいいのに。

「俺は去年一年間、お前を見てきてもしかすると 吉井はバカなんじゃないか？ なんて疑いを抱いていたんだ」

西村先生は去年、僕のクラスの担任だった。

ゲームを没収されたり、殴られたりと散々だった。

まあ、幽霊騒ぎの時は僕の助けになってくれて、一応感謝はしてるけど。

それでも、僕はそんなに問題を起こした覚えもないし、バカと呼ばれるような事をした覚えだってない。

「それは大いなる間違いですね。更に 節穴 なんて渾名をつけられちゃいますよ」

自分で言うのもなんだけど、一年生の最後にやった振り分け試験は、あまり勉強しなかったのに良い出来だった。

きっと、今までの僕のいくらかだけ起こしてしまった問題で下がった評価も、元に戻ったに違いない。

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

やっぱりうまく開かないな。仕方ない。上の部分を破るか。

ビツと軽い音を立てて封を切ると、中に入っていた一枚の紙を取り出す。

さて、僕はどこの所属だろう？　僕の成績だとDクラスあたりだろうか？

『現実を見る。そんな事、わかりきってるじゃないか』
えっ！　もしかして、僕はCクラスなの！？
まさかDクラスより上だったとは。

なんだか、ため息をつく音が聞こえるけど、気のせいだろう。

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」
折りたたまれた紙を開き、クラスを確認する。

吉井明久……Fクラス

「『お前はバカだ』」

二人揃って、言わないでえええええっつ！！
こうして僕の最低クラス生活が幕を開けた。

二年Fクラスの教室の前。

「すいません。ちょっと遅れちゃいました」

遅刻してきたので、勢いよくドアを開けながら、愛嬌たっぷりに
言い放った僕。

これから共に過ごす仲間たちならば、きっと僕の言葉に温かい言
葉が、

「早く座れ、このウジ虫野郎」
……返ってこなかった。

声は教壇の方から聞こえた。

という事は、今のは教師だろうか？　いくら教師とはいえ、今の
は失礼にもほどがあるだろう。

僕が睨むように教壇を見ると、そこには教師ではなく、僕と同じ生徒が立っていた。

「というか、僕の友達だった。去年からの悪友だった。」

「……雄二、何やってんの？」

坂本雄二。

説明は……しなくてもいいか。

「何か一瞬、お前に殺意が沸いたんだが……。まあ、いい。俺は先生が遅れているらしいから、代表として代わりに教壇に上がってみたんだ」

クラス代表。

それは各クラスで最も成績は良かった者が任命される。

当然、Aクラスの代表であれば、この学年でトップの成績の人となる。

クラスにおいて、代表とはそのクラスのリーダーである。

僕はつい顔がにやけてしまう。

なぜなら、クラス代表である雄二を説得できれば、このクラスを僕が動かす事も可能となるからだ。

『お前には無理だろ』

失礼な！ あんまり僕の事を見くびらないでもらおうか。

『お前、今まで坂本をつまく使えた事なんてないだろ』

ぐっ……。そこまで言うなら見せてやろうじゃないか。この僕の真の力を！

「ねえ、雄二。「却下だ」まだ何も言っていないんですけど！？」

こちらが言う前に断るなんて。人の話は最後まで聞くのは当たり前前の事だろ。

まったく、どういう頭をしているんだ、この馬鹿は！

「何か企んでいるのが見え見えなんだよ、バーカ」

むきーっ！ どいつもこいつもお！

そうこうしている内に、このクラスの担任となる福原先生が来た

ので、席に着く僕と雄二。

席に着く、と言っても正確には腰を下ろすと言うのが正しい。
なぜなら、このクラスには椅子がないからだ。

文月学園では、教室の設備もクラスによって異なる。

例えば、一番上のクラスのAクラスだと、リクライニングシートやノートパソコン、個人用のエアコンや冷蔵庫など、本当にここは学校かと思うぐらいの設備が用意され、教室もとんでもなく広い。

だが、逆に最低クラスのFクラスは畳に座布団、あと卓袱台があるだけ。その上、教室の状況は最悪。狭くて、廃屋のような状況だ。こちらにも本当に学校だろうかと思う。Aクラスとは逆の意味で。

福原先生は自分の自己紹介をすると（チョークがなかったので黒板に名前は書かなかった）、今度は生徒達に一人ずつ自己紹介させる。

福原先生の指名で廊下側の人から自己紹介が始まる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

ん？ 誰かと思えば秀吉じゃないか。

僕の去年からの友達の人だ。

爺言葉を使っていて、性別も男なんだけど、その見た目はどう見ても女の子にしか見えない。

気をつけていないと、僕も女子と間違えてしまうから、注意しないと。

秀吉は男、秀吉は男、秀吉は男……。

『僕も、まさか現実^{リアル}で男の娘がいるなんて思いもしなかったよ』

そうだよな。 やっぱり秀吉は女の子だよなっ！

あっ！ 今、笑ったよ！ やっぱり可愛いなあ、秀吉は。

『女子と間違えないように気をつけるんじゃないかったのか？』

はっ！ そうだった。 つい、うっかり。

「……………土屋康太」

僕がなんとか道を踏み外さずに済んだ所で、次の生徒が立ちあがって名前を告げていた。

どれどれ？ って今度も知り合いだ。

こちら僕も僕の去年からの友達の一人だ。

いつもおとなしく目立たないようにしているんだが……、そっちの方がやりやすいんだろう。イロイロと。

にしても、見渡す限り男だな。おかげで秀吉の可愛さが強調されてしまうじゃないか。

流石に学力最低クラスともなると、女子はほとんどいないんだろうか。

「日本語は会話はできるけど、読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

いつの間にか、次の人に移っていた。

しかも、今度はこのクラスには珍しく女子の声。良かった。最低一人はいるんだ。

「趣味は吉井明久を殴る事です」

誰だっ！？ 恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つ奴は！
「はろはろー」

笑顔でこちらに手を振るのは、

「……あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

またしても知り合い。去年のクラスメイトで僕の天敵でもある島田美波さんだ。

『何でアイツまで同じクラスなんだ！』

確かに、同じクラスだと去年のようにまたボコボコに。

というか、なんでこんなに知り合いだらけなんだ？ まさか類は友を呼ぶとか……？ そんな！ 僕がこいつらと同レベルだなんて！

『確かにアイツらの方がお前よりはまだマシだろうな』

僕が上って意味だよ！ てか、ゲームばかりしてるお前に言われたくはない！

島田さんの自己紹介が終わり、その後は淡々と自分の名前を告げるだけの作業が進む。

僕の前の人が終わり、ついに僕の番となる。
軽く息を吸って、立ち上がる。

学校生活において、出だしは肝心だ。たくさん仲間を作って一年間楽しく過ごすためにも、ここは失敗できない。

僕が明るく気さくな好青年でなおかつ、頭の切れる優れ者という事をアピールしておかねば。

『頭が悪いから、このクラスにいるんだけどな』

そこ、少し静かにしなさい。

一瞬考えて、軽いジョークを織り交ぜて、自己紹介をする事に決定。努めておどけた声でクラスの皆に僕という人間を紹介する。

「コホン。えーっと、吉井明久です。僕の事は、気軽に「クズ野郎」と呼んで下さいね……って、違う！雄二、なんて事を言うのさ！」

このクズ野郎があああーっ！！！！

「何でそこで皆も乗るの！？……もういいです。今は忘れてください」

もうこのクラスで生きていける自信がない。初日からクラスメイトの悪口を平然と言つてのけるだなんて。しかもクラス全員で。

そんな僕の気持ちとは無関係に自己紹介は続く。

ほとんど全員が自己紹介を終え、僕の瞼も良い感じに下がってきた所で、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てた女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

えっ？ と、誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声上がる。そりゃそうだ。普通はビックリするだろう。

クラスがにわかに騒がしくなる中、数少ない平然としている人物の一人、担任の福原先生がその姿を認めて話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしている所なので姫路さんもお

願います」

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしく願います」
小柄な身体をさらに縮こまらせるようにして声を上げる姫路さん。
その優しそうで可憐な容姿は、男だらけのFクラスで異彩を放っている。

だが、皆はその容姿を見て驚きの声を上げたんじゃない。

「はいっ！ 質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

質問されて、まるで小動物みたいに驚く姫路さん。その姿が可愛かったり。

「なんでここにいますか？」

「そ、その……」

聞きようによつてはかなり失礼な質問だが、これはクラスにいる全員の疑問のはずだ。

彼女、姫路瑞希さんの成績は入学して最初の試験で学年二位を記録しているし、その後も必ず上位一桁以内に名前を連ねている。間違つても、Fクラスにくるような成績の持ち主ではない。むしろ、Aクラスであつて当然だ。

そんな彼女がなぜこの教室にいるのか。

僕は振り分け試験の時、彼女のすぐ近くの席だったのでその理由を知っている。

振り分け試験の最中に、彼女は熱を出して途中退席してしまった。文月学園ではテストを最後まで受けられなかった場合、自動的に0点扱いとなる。よつてFクラスに振り分けられてしまったのだ。理由を話し終えた姫路さんは逃げるように僕と雄二の隣の空いている卓袱台へ着こうとする。

姫路さんのFクラスに来た理由を聞いたクラスメイト達は、なぜか言い訳大会を始めている。想像以上にバカばかりだ。

席に着くや否や、卓袱台に突つ伏して安堵する姫路さん。

ああ、やっぱり可愛いなあ。こんな近くの席になって、正直ドキする。

よし。席も近い事だし、ここは話しかけるチャンスだ！こういった些細なことからドラマは始まり、僕らは結ばれる事になる。

「あのさ、姫」

「姫路」

僕の声に被せるように、隣に座っている雄二が声をかける。酷いっ！　せつかくの僕の人生計画　クラスメイトから結婚まで　君と出逢えた春　全654話　が開始二分でエンドロールに！残り653時間と58分は何を放送すればいいのさ！

『ゲームであれば、クソゲーの予感満載だな』

クソゲーとか言うなっ！　二人の幸せな未来が……。

「は、はいっ。何ですか？　えーっと……」

慌てて雄二の方を向くと、スカートの裾を直す姫路さん。椅子じやなくて座布団だから裾が乱れやすいんだろっ。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

深々と頭を下げる彼女。挨拶も丁寧だし、育ちが良さそうだな。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

と、思わず口を挟んでしまう。試験の時、かなり悪そうに見えたから。今は大丈夫なんだろうか？

「よ、吉井君！？」

僕の顔を見て驚く姫路さん。ちよつと、いやかなりショックだ。もしかして、姫路さんにまで　あの噂　が届いていたんだろっか？

「姫路。明久がブサイクですまん」

そういう理由だったの！？　だとすれば、さらにショックだ。というか、雄二の奴め。フォローのつもりかもしれないけど、逆にショックだよ！

「そ、そんな！　目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗

だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ……」
「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれない。俺の知り合いにも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

なんて、雄二の嬉しい情報。これは是非とも詳細を確認せねば。

聞くんじゃなかった。

雄二からの情報だと、久保利光（ ）さんが僕に興味を持っていると……。

今すぐ、焼却炉で塵一つ残さず、この記憶は燃やしてしまおう。

……………焼却完了！

そういえば、姫路さんはやはり女の子だからだろうか。僕以上に雄二の話にぐいついていた。

そして、今。

僕と雄二は廊下にいる。先生が教卓を壊して（ボロすぎない！？）、替えの教卓を取りにいつている間に、僕は雄二を廊下へと呼びだした。

用件はただ一つ。

「Aクラス相手に試召戦争をやってみない？」

試召戦争。

文月学園には科学とオカルトと偶然により完成された 試験召喚システム というものがあり、教師の立会いの下、テストの点数に応じた強さを持つ 召喚獣 を喚び出して戦う事ができる。

テストの点数には上限がなく、一時間という制限時間と無制限の問題数が用意されていて、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試みだ。

そして、召喚獣を用いたクラス単位の戦争、それが試召戦争だ。下位クラスが上位クラスを倒せば、お互いのクラスの設備を入れ替える事ができる。

ただし、FクラスがAクラスに勝つなんて事はほぼ不可能と言える。

だが、それでも僕はAクラスの設備を手に入れたい。振り分け試験の時、途中退席しただけでFクラス行きとなった姫路さん。

僕や雄二は実力だからとかくとして、彼女がFクラスみたいな酷い教室で過ごすのは間違っている。

体調不良の人に少しのチャンスもくれないんだったら、僕達でまともな設備を手にいれてやる。

「……何が目的だ」

急に雄二の目が細くなる。警戒されているんだろうか。

「いや、だってあまりに酷い設備だから」

「嘘つけ。勉強に興味ないくせに、勉強用の設備なんかの為に前が戦争を起こすなんて、そんなことはあり得ないだろうが」

『もうちょっとマシな嘘はつけないのか』

違う！ 僕の嘘が下手なんじゃなくて、雄二の勘が無駄に鋭いんだ！

「あー、えーっと、それは、その……」

「……何だ、姫路の為か」

ビクッ！

図星を突かれて思わず背筋が伸びる。

「ど、どうしてそれを！？」

「顔に書いてある、と言いたいところだが、単純にカマをかけてみただけだ」

雄二の目から警戒の色が消えて、代わりに楽しげな笑みが浮かぶ。

「べ、別にそんな理由じゃ」

「気にするな。お前に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていた所だ」

「え？ どうして？ 雄二だって全然勉強していないよね？」

「だからこそ、Fクラスにいるわけだし、僕と同じで設備なんかに興味はないはずだけど。」

「世の中学力だけが全てじゃないって、証明したくてな。それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし
おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

雄二の話は正直よく理解できなかった。

先生が壊れた教卓を（ボロい）教卓に替えて、気を取り直してH Rが再開される。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

自己紹介もついに最後の一人となり、その一人である雄二は立ちあがって、いつもとは違うクラス代表として相応しい貫禄を纏って、教壇へと歩み寄る。

雄二は自信に満ちた表情で教壇に上がり、僕らの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は好きなように呼んでくれ」

クラスメイトから大して注目されるわけでもない。Fクラスという馬鹿の集まりの中で、まだまともな成績だったと言うだけの話。他から見れば五十歩百歩といった存在。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そんな生徒が、ゆっくりと、全員の目を見るように告げる。

魔の取り方が上手いせいか、全員の視線はすぐに雄二に向けられるようになった。この辺は、カリスマ性と言ったところだろうか。

普段はそんなの微塵もないのに。

皆の様子を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移り出す。僕らも、つられるようにその視線を追って、教室のあまりにも酷

い備品を眺める。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸おいて、静かに告げる

「不満はないか？」

大ありじゃあつ!!!

二年F組生徒の魂の叫び。

「これは代表としての提案だが」

クラス全体からあがる不満の声の中、雄二はこれから戦友となる仲間達に野性味満点の八重歯を見せ、

「FクラスはAクラスに 試験召喚戦争 を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

Aクラスへの宣戦布告。

あれほど、不満の声をあげていた生徒達も、たちまち否定的な言葉を投げかける。

戦争を提案した僕だって、Aクラスに勝てるとは正直思えない。だからといって、引く気はないけれど。

「安心しろ。このクラスには試験召喚戦争で勝つ事の出来る要素が揃っている」

こんな雄二の言葉を受けてクラスの皆が更にざわめく。

勝てる要素？ 僕らはFクラス、学年最下位グループだよ？

『まさしく無理ゲーだな』

その通り。

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす悪友。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る土屋康太。

姫路さんがスカートの裾を押さえて遠ざかると、アイツは顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。

流石だ。あそこまで恥も外聞もなく低い姿勢から覗き込むなんて、アイツ以外にできる人間はいない。

「土屋康太。こいつがあ有名な、ムツリーニ寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツリーニ。

それは男子には畏敬と畏怖を、女子には軽蔑の念を以て挙げられる。

学園一と言っても、過言ではないぐらいの　ムツリスケベ　なのだ。

実際、今も畳の跡を隠そうと必死になっている。どう考えても無駄なのに。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。ウチの主戦力だ」

自分の名前を挙げられて、少し恥ずかしそうにする姫路さん。やっぱ可愛い。

もし試召戦争に至るとしたら、彼女ほど頼りになる戦力はいないだろう。

教室に明るい声が飛びかい始める。

「木下秀吉だっている」

秀吉は学力ではあまり名前は聞かないけど、他の事で有名だった

りする。演劇部のホープと呼ばれ、双子のお姉さんもいる。しかも、そのお姉さんは学年で一桁に入るほどの実力者。

「当然俺も全力を尽くす」

坂本雄二はかつて神童と呼ばれていた事もあった。

小学校の頃だったが、中学に入って、雄二は勉強を一切しなくなり、その名声は過去の栄光となってしまった。

だが、神童とまで呼ばれたほどのだから、真面目にやれば、実はかなりすごいかもしれない。

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気は教室内に満ちていた。

そう。気が付けば、クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

……シン

そして一気に下がる。

ちいっ！ 僕の名前はオチ扱いか！ というか、ここで僕の名前を挙げる必然性を感じられない。

「まったく、使えない奴だな」

「どうして、僕が悪いみたいな事言つのさ！ どう考えても雄二のせいじゃないかー！」

まあ、僕としては聞いたことがない方がありがたい。だって、どうせろくな話じゃないし。

「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは 観察処分者 だ」

言いやがった。

それってバカの代名詞じゃなかったっけ？ と、クラスのだれかがそんな致命的な台詞を口にする。

「ち、違っよっ！ ちょっとお茶目で可愛い十六歳につけられる愛称で」

「いかにも。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「学園生活不適合の烙印を押された、開校以来初のろくでなしとも言える！」

「よくぞ、そこまで言ってくれた。表へ出る、ちくしょう！」

観察処分者。

ちよびつと学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分では僕がそれに該当していたりする。僕はほんの少しだけ他の人より勉強が苦手なだけなのに。

『どこがほんの少しだけだ？』

……じゃあ、少しだけという事で我慢しよう。

って、何でそんな哀れな人を見る目で僕を見るのさ！？

「観察処分者、ですか？ それって、どういうものなんです？」

聞き慣れない単語なのか、首を傾げる姫路さん。頂点に近い場所にいただけあって、そんな言葉とは無縁だったんだろう。

「要は教師の雑用だな。力仕事なんかを、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

召喚獣は本来物に触れる事は出来ない。

特殊な加工をしている学校内の床に立つ事は可能だが、基本的には召喚獣同士でしか触れない。

だが、僕の召喚獣だけは違う。雄二の言った通り、物に触れることができる特別製だ。

「そうなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんな事が出来るなら便利ですよね」

姫路さんの目がキラキラ輝いている。若干の羨望と尊敬のこもった視線が僕に送られて、正直むずがゆい。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

手を振って否定する。

実際、本当にたいしたものじゃない。

そもそも召喚獣は教師の立会いの下でしか呼び出せず、観察処分

者の召喚獣が物を持った際に起こる負担などは、何割かが僕にフィードバックされる。

つまり、自分の為には一切使えないのに、疲労や痛みは僕のものになる。これじゃただの罰だ。

だからこそ、観察処分者。凄くも、便利でもない。成績不良かつ学習意欲に欠ける生徒に与えられるペナルティ。バカの代名詞と呼ばれる理由はそこにある。

観察処分者という言葉に呆れるような言葉が飛び交う。お前らだつて、大してかわったものじゃないくせに。

あれ？ そういえば吉井って、もしかしてあの、幽霊憑きの吉井か？

えっ？ ああ、そういえば確かにちっ、ついに気づかれた。

僕は去年、一時期、幽霊憑きと呼ばれ、まわりの人に敬遠された事がある。

僕のまわりを飛んでいる幽霊が目撃されたり、写真に写っていたりしたからだ。

もっとも、雄二達や鉄人のおかげで、すぐにその噂はなくなり、皆と普通に話せるようになったのだが、あの時は流石に心が傷んだ。やっぱり、まわりの人から避けられるというのは辛い。

だが、別に僕に幽霊が憑りついているのは間違いではない。事実、今だってこの教室にいる。

本人はゲームをしているが。

「そういえば、そんな噂が流れたような。確か眼鏡をかけてゲームをしている幽霊でしたっけ？」

姫路さんの所にまで広まっていたのか。

桂木桂馬。

それが僕に憑りついている幽霊の名前だ。現実をクソだと言いつち、ゲームの世界に生きる眼鏡をかけた少年である。

一年ほど前から、僕に憑りついている。

ただ本人は実際には死んでいないらしいのだが、なぜこうなったのかはわからないらしい。

今のところ分かっていることは少しだけ。

僕からそんなに遠くに離れる事はできない。

基本的には誰にでも見えるし声も聞こえるみたいだが、僕以外には見聞きできないようにすることもできる。

壁の通り抜けなどは出来ず、人にぶつかる事はない。

物に触れる事はでき、小さめの物ならば持てば透明にすることができる。

食事や睡眠などは必要ない。

僕の心の声を聞くこともできる。

短い間ならば、僕の体に憑依することもできる。

僕の痛みや疲れなどが、桂馬にもフィードバックする。

これだけの事を調べるのに随分な時間を要した。

情報が少なすぎる、と桂馬に言われ、僕も桂馬もが必死に調べたのだが結局わかったのは状況だけでこうなった原因はまったくわからなかった。

と言っても、状況を把握した桂馬は落ち込むどころかむしろ喜び、毎日二十四時間いつでもPFPというゲーム機を手に、ひたすらギヤルゲーをしている。

学校だろうとどこだろうと、誰にもばれずにゲームができるのだ

から羨ましい。

ちなみに桂馬の事は僕以外誰も知らない。

雄二達にすら教えていない僕の秘密の一つだ。

他の秘密はきちんとベッドの下などに隠してある。もちろんそれこそがトップシークレットだ。

「気にするな。こいつはいてもいなくても同じような雑魚だし、そんな奴に幽霊も憑きたがらないさ」

「雄二、そこは僕をフォローすべきだよな？」

『別に本当の事だろ』

桂馬、そこまで言わなくてもいいじゃないか……。

僕のまわりには僕を攻撃する人しかいないだろうか？

「とにかくだ。俺達の力の照明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「結局、僕のこととは無視なんだね」

近いけど、遠い。まさかそれを体現する日が来るなんて。

「全員筆を取れ！ この境遇を変えてやる！ 出陣の準備だ！」

こうして、僕らの果てなき戦いの幕が切って落とされた。

FLAG 1 / 0 幽霊になってもゲームを（後書き）

明久「ご都合主義すぎない、この設定!？」

桂馬「どうせその程度の能力しか持たない作者だという事だ」

明久「で、何で僕達がここに？」

桂馬「あとがきを考えるのがめんどくさいから、キャラ達に任す気らしい」

明久「そんな適当な……」

桂馬「まあ、いい。それでは次の話で会おう……。あっ！時限イベントだ！」

明久「台無しだよ、桂馬……」

FLAG 1 / 5 日本史

問 以下の問いに答えなさい。

『僧のような格好をして、薙刀・熊手・大鋸など多くの武器を持ち、最期には大量の矢の雨を受けて、立ったまま死んだとされている歴史上の人物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『武蔵坊弁慶』

教師のコメント

正解です。あえて源義経の存在を出さなかったのですが、姫路さんには意味ありませんでしたね。

木下秀吉の答え

『武蔵坊弁慶』

教師のコメント

正解です。やはり演劇部だからでしょうか？ 歌舞伎の『勧進

帳』は見るべき価値のある日本の文化です。

吉井明久の答え
『ギルガメッシュ』

教師のコメント
ゲームのやり過ぎです。

FLAG 2 / 0 試召戦争の前に

「と言う訳で、明久。Dクラスに行つて、宣戦布告をしてこい」

「……下位勢力の使者つて、大体酷い目にあつよね？」

そんな事、戦争における常識じゃないか。

『絶対行くなよ。明久。お前が怪我をしたら、僕まで痛いんだ』

僕のためじゃなくて自分の為かよ！

一瞬でも心配してくれたんだと思つた僕が馬鹿だったよ。

去年から、僕に危害が及びそうな事が起きると、桂馬は色々と助言をしてくれる。

もつとも、それは自分が痛いのが嫌だからなのだが。

「大丈夫だ、明久。Dクラスがお前に危害を加える事はない。俺を信じろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

わずかな逡巡すらなく力強く頷く雄二。

という事は

『100%嘘だな』

えっ！？ 嘘なの！？

『お前信じてたのか』

どうして嘘つて言いきれのさ。

雄二はジョークは言つても、嘘はあんまり言わない男だよ？

『物語の展開的に言えば、ここは確実に明久がボコられる場面だ。受けると言つておいて、誰かに代わりに行つてもらふんだ』

桂馬がそう言うなら、それでもいいけど……。

そんな事を頼めるほど、このクラスで親しい人はまだ少ないんだけど。

「わかったよ。そこまで言うなら使者は僕がやるよ」

「頼んだぞ、明久。死者という大役、しっかりと果たしてこい」
今、使者の書き方がおかしかったような気がする。

教室の扉を開けて、廊下へと出る僕。

さて、どうやって他のFクラスの人に声をかけよう？

『あそこの奴で良いだろ』

ん？ 誰？

桂馬の指差した先にはFクラスの須川君（だったかな？）がいた。
Dクラスとの戦争を決めた時にはまだいたから、おそらく僕と雄二が話し始めたあたりでトイレにでも行っていたんだろう。

「須川くん」

「ん？ 何だ、吉井」

向こうは僕の名前を覚えてくれてたみたいだ。嬉しいなあ。

…… 去年の噂のせいじゃなければいいけど。

「実はDクラスへの使者を出すので、教室にいなかった須川君がやるってことになっちゃったんだ」

「マジか！？ うわー、トイレに行かなきゃよかった」

ごめん、須川君。でも、僕も命が惜しいんだ。

本当はこれから仲良くしていく友達にこんなことをしたくはないけど

「仕方ねえ。じゃあ行ってくる、吉…… クズ野郎」

行つて、ボロボロにされてしまえ。

というか、まだ覚えてたのか、その言葉。

後で雄二を殺るか？ いや、だがそれでは意味がない。

クラスメイト達全員（女子二人と秀吉は除く）の記憶を飛ばした方が効果的だな。

方法はクスリか、それとも手っ取り早く、記憶がなくなるまで殴り飛ばした方が……。

『どうやらもう帰ってきたみたいだな』

えっ？ あっ、ホントだ…… って、本当にボロボロになってる！
ドン！ っと、僕が扉を勢いよく開け教室に飛び込むと、須川君

もつづくように入ってくる。

が、すぐに床に倒れると、二、三回呻いた後、動かなくなった。

「須川君！？ 須川くん！！」

くそう。Dクラスの奴らめ。許さない。必ず須川君の仇を取ってみせる！

倒れた須川君を見て、他のFクラスの生徒達も、決意に満ちた目になる。

必ず勝つ、という戦う者の目に。

『わかつてると思うが、まだ死んでないぞ。……まさか現実^{リアル}に対して僕がここまで突っ込まなくちゃいけない日が来るとは』

桂馬が何か言っているが、僕の耳には届かない。

僕には今、須川君の仇を討つ事と、もう一つ。やるべき事がある。

「くたばれ、雄二いいッ！」

「うおっ！？」

間一髪で僕の拳を避ける雄二。

チイツ！ 無駄に運動神経の良い奴だ。

「いきなり何しやがる！」

「黙れ、このバカ。お前が大丈夫って言ったDクラスへの使者をしたせいで、須川君はこんな事になったんだぞ！」

「そうか、予想通りだな。しかし、まさかお前がその事に気づいていたとは」

「雄二のせいで須川君が……須川君が……」

あんなにボロボロになつて。見ているだけで涙が出てきそうだ。

それもこれも、全部雄二のせいだ！

『いや、僕らが使者をやりたくないから、須川に任せたのも原因の一つだから』

いや、それだって僕に使者（死者）をやらせようとした雄二が悪いんだ。

だから、僕は雄二を一発殴らなくちゃいけないんだ！

「お前のせいで僕の呼び名がクス野郎で定着しつつあるんだよ！

くたばれ、ゴミ野郎ーッ!!」

「それは須川とは関係ないじゃろう!?」
違うよ、秀吉。

須川君が殴られた原因「雄二

僕がクズ野郎と呼ばれた原因「雄二

つまり、関係がある!

『もう知らん。とりあえず、ゲームの邪魔だけはするなよ』
わかってるよ。

正面から雄二をぶっ飛ばして

「ふんっ!」

「ぐぼあああっ!!」

『ぐばあっ!』

クロスカウンター気味に殴り返された上、腕を後ろに回され、関節をきめられる。

「何か言いたい事があるなら聞くな」

「あはは、やだなあ、雄二。僕ら友達じゃないか。だから、今ムツッリーニから手渡されたそのトンカチを振り下ろすのは止めてほしいな」

なんだかんだ言っても、雄二と僕は去年からの友人なんだ。

お互い相手を傷つける気なんて、あるわけがないじゃないか。

だからきつと、あのトンカチだって雄二の冗談で

「来世も楽しく生きろよ」

「わあああああっ!! ごめん、雄二! 僕が悪かった!」

殺る気満々だった。

「それぐらいで開放してやったらどうじゃ雄二」

「……まあ、いいだろう。一応、使者の仕事は終わったみたいだしな」

やっと、解放された。

ああ、それにしても、ありがとう、秀吉。やっぱり君となら僕は
はっ！ 騙されるな、吉井明久！

「吉井君、大丈夫ですか？」

痛む腕をさする僕を心配して、姫路さんが駆け寄ってくる。

ああ、なんて優しいんだろう。ここは男として余計な心配をかけないようにしないと。

「あ、うん。大丈夫。すぐに痛みも引くだろうから」

「吉井、本当に大丈夫？」

島田さんまで来てくれた。これならやっぱり僕が宣戦布告に行っても良かったかも。

『良い訳ないだろ！ 僕も痛いんだからな！』

別に僕の痛みが100%反映される訳じゃないんだから良いじゃないか。まったく少しは我慢を覚えなきゃ。

『現実リアルにおいて僕を悪口で傷つける事が出来た奴もいたが、明久に言われると傷つくより腹が立つな』

何で？ うーん、わからん。

「吉井、どうなの？」

ああ、そういえば、島田さんも僕を心配してくれていたんだった。やっぱりなるべく心配をかけないようにしなくちゃ。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！ もう駄目！ 死にそう！」

慌てて腕を押さえて転げ回る。島田美波、やはり油断ならない女だ。

『やっぱり現実リアルは不親切だな。どれがフラグなんだかわかりにくすぎる』

僕の死亡フラグは常にMAXだと思っただけど。

「そんな事はどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」
自分でやったんだから少しは僕を心配してくれてもいいのに。

本当に雄二は僕の友達なんだろうか？ 前から週に最低七回は気になったりする。

他の場所で話し合いをするようで、雄二は扉を開けて、廊下へと出て行った。

姫路さん、秀吉、島田さん、ムッツリーニ、僕、あと桂馬もそのあとにつづいた。

「今日の午後から開戦予定だ」
「ここは屋上。」

澄んだ青空の下、皆で屋上に腰をおろしている。こうしているとなんだか眠気を誘う。

近くでピコピコとゲームの電子音が聞こえず、姫路さんに膝枕をしてもらえればもう言う事はなかっただろう。

「それじゃ先にお昼ごはんってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ごはんくらいはまともな物を食べろよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」
たとえ0円だとしても、スマイルで腹はふくれないんだよ。

「えっ？ 吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路さんが驚いたようにこちらを見る。きっと彼女は規則正しい生活を送っているのだろう。色々と発育も良さそうだし。

「いや。一応食べてるよ」

「……あれは食べてると言えるのか？」

雄二の横槍が入る。

「何が言いたいのか」

「いや、お前の主食って

水と塩だろう？」

雄二の哀れむような声。

なんて失礼な。僕を馬鹿にするにも程がある。

「きちんと砂糖だって食べているさ」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「なんか、皆の目が妙に優しいのが逆に辛い。」

「ま、飯代までお前が遊びに使ってんだから、自業自得だよな。お前はゲームのやり過ぎだ」

『明久の空腹の感覚が僕にこなくて幸いだったよ』

「し、仕送りが少ないんだよ！」

実は両親が仕事の都合で海外に居る為、僕は一人暮らしをしていたりする。もともと、今は桂馬もいるから一人ではないが。

親から送られてくる生活費は僕の趣味に消える。

と言っても、雄二の言う遊びに全部使い切っているわけではない。僕もゲームを買ってはいるが、桂馬は僕の比ではないぐらいのゲーム（ギャルゲー）を買っていて、最近はそのを借りたりもしているの、僕がゲームを買う量は減っているのだ

桂馬のゲームは桂馬のお金（出所はM資金との事）から出ているので、気にしなくていいのだが、桂馬のPFPや他のゲーム機本体の電気代がかなりかかる。

だって、桂馬は寝なくても良いから、まさしく四六時中ゲームしてるんだもの。そりゃ、電気代もかかるさ。

よって、僕がご飯を食べれない原因は桂馬に

『どうせ、僕が電気代を使わなくても、何か別の事に使うだろ』

……否定できないのが辛い。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

突然の優しい言葉に僕は耳を疑った。

『手作りのお弁当。ギャルゲーでも絶対に逃してはならないイベントの一つだ』

そつだよね！ 姫路さんの手作り弁当が食べられるだなんて夢のようだ。

「本当にいいの？」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

ここは素直に喜ぼう。雄二のからかう台詞だって心地良い。

「ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

なんだか面白くなさそうな島田さんの言葉。もしかして、島田さんも姫路さんの手作り弁当が食べたいとか？

「あ、いえ！その、皆さんにも」

「俺達にも？ いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

全員が姫路さんの提案をありがたく受ける。

これで全部で六人分。作るのが大変そうだ。

きっと、姫路さんの料理って愛情がたっぷりこもってって美味しいだろうな！。

『お前への愛情ってわけじゃないけどな』

返せ！ 僕の幸せに満ちた世界を返せ！^{妄想}

『ふん。だいたい、手料理はゲームでは欠かせないイベントの一つだが、現実ではそう上手くいくわけがない』

どう言う事？

『実際に手料理をしてもらうとその料理がとんでもないものだった、なんて事だってあり得る』

何でこんな話を話したのかはわからないけど、桂馬の顔は至極真面目だった。

というか、その顔はまるで思い出したくない事を思い出しているかのような顔だった。

あの顔は、手料理がまずかった……いや、違うな。料理が動いた、

と言った顔か。

……まさかね！ 料理が勝手に動くななんてそんな事あり得るわけがないし。

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

おお、そういえばそうだった。すっかり忘れてた。

「雄二。一つ気になっておったのじゃが、どうしてDクラスなのじゃ？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつての事だ」

雄二が鷹揚に頷く。

Dクラスを攻めて、Eクラスを攻めない理由。何だろう？

「大方、Eクラスには必ず勝てるから。Dクラスと戦うのはAクラスと戦うための布石だろ」

桂馬、わかるの？

「当然だ。姫路がいるならば、Eクラスに勝つのは容易い。Dクラスとの戦いは、どんな作戦を立ててるのかは知らないが、作戦があるとか言つてたろ。まあ、後はFクラスに自信をつけさせるためとかなら」

いつもゲームばかりしてるくせに、こういう時には結構頭が回るよね。

「別にギャルゲーのルートを全て覚えるのに比べれば、楽なもんだよ」

どこまでもゲーム中心なんだね。

「ねえ、雄二。それなら確実に勝てるEクラスと戦って、皆の士気を高めた方が良くないじゃないの？ Dクラス戦はその後にして」

何気なく質問する僕。

さっきの雄二が皆に説明している間に、桂馬が説明した事を考えれば、そっちの方が士気を上げるのにはいいはず。

もっとも、桂馬の言っていた布石があるからかもしれないけど。

「おい、明久」

「なに？ 雄二」

「お前、もしかして熱でもないか？」

「何で急にそんな事を言い出すの！？」

「なんか雄二が今まで見たことがないほど、驚きに満ちた顔をしている。」

「そうじゃぞ、明久。ちょっと保健室で寝ていた方が良いのではないかな？」

「……………（コクコク）」

「吉井、大丈夫？」

「皆が僕に優しい言葉をかけてくる。」

「おかしい。かつてこれほどまで皆が僕を心配してくれた事は一度もなかった。一体、僕が何をしたらって言うんだ？」

「唯一、姫路さんだけは事情がよくわからないのか、困ったような顔をしてこちらを見ていた。」

「まさか、明久のくせにそんなまともな考えが出来てるなんて。しかも、ある程度俺の考えもわかってやがるとは」

「それだけで、こんなに心配されるなんて、皆の中で僕の評価はどれだけ低いんだよ！！」

「まあ、いい。明日は嵐が来るかもしれないが、諦めよう」
「ちくしょう。こんなに言われるなんて。」

「確かに桂馬に言われるまで気づかなかったけどさ。何もそこまで言わなくても。」

「一々、Eクラスとまで戦ってたら面倒くさいだろ？ 心配しなくても、Dクラスにだって勝って見せるさ。それにさっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「桂馬の言った通りだった。」

「あ、あの！」

「と、姫路さんにしては珍しい大きな声。どうしたんだろう？」

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。吉井君と坂本君は、もしかして前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて」

「それはそうと！」

雄二の声を遮るようにわざと大きな声を出す。

しかし、雄二め。口が軽い奴だな。後で口をホッチキスでとめてやろうか。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「言っただろ？ 勝って見せる。それに、そもそも負けるわけがないさ」

僕の心配を笑い飛ばす雄二。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

何の根拠もないただの言葉。

だが、その言葉だけでなぜかその気になってくる。

雄二の言葉にはそんな力があつた。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。

荒唐無稽な夢だと、笑う人もいるだろう。

でも、そんな事は関係ない。

無理？ 不可能？ だからどうした。

始めてみなくちゃわからないじゃないか。

折角、こうして同じクラスになれたんだから、一緒に何かを成し遂げてみるのも悪くない。

そう、皆で。

皆でやるんだから、協力してもらっよ、桂馬。

『断る。僕はFクラスの人間じゃないし、そもそも文月学園に入学した覚えもない』

それでも、僕に憑りついている存在なんだから。少しは協力してよね。

桂馬は何も言わない。

だけど、僕もそれ以上は言わない。

後は信じるだけだから。

「それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、僕達は勝利の為の作戦に耳を傾けた。

FLAG 2 / 0 試召戦争の前に（後書き）

桂馬「僕は解説キャラじゃないぞ」

明久「僕だって、桂馬に教えてもらわなければいけないほど馬鹿じゃないよ！」

桂馬「いや、そうでもないだろ」

明久「えーっ！ー！！」

桂馬「それより、明久の言葉でどれが地の文でどれが僕への語りかけなのかがわからん！」

明久「確かにね」

桂馬「今更だが、もっとわかりやすくできなかったのか」

明久「まあ、諦めよう。……あ、なんか紙が。えーと、『次の話もよろしく願います。誤字・脱字などがありましたら是非教えてください』」

桂馬「自分で言えばいいのに」

FLAG 2 / 5 地理

問 以下の問いに答えなさい。

『ペルーの山の上にある世界遺産で、「空中都市」とも呼ばれるインカ帝国の遺跡を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『マチュピチュ』

教師のコメント

正解です。マチュピチュは新・世界七不思議にも選ばれている、まだまだ未知の遺跡です。これから新しい発見がある事でしょう。

坂本雄二の答え

『○ピユタ』

教師のコメント

空中都市と言っても、本当に飛んでいるわけではありませんよ。

吉井明久の答え

『ピョー』

教師のコメント

すでに都市ですらありません。一部だけ覚えて、そこからさらに別のモノに変換するのは止めましょう。

FLAG 3 / 0 Dクラス戦

そして、僕達は見事Dクラスに勝利を収めた。

『何を言ってるんだ。Dクラス戦はこれからだろう』

あーっ！　なんて事するのさ！

こう言っておけば、なんか知らない内に終わってたかもしれないのに。

『別に現実なんて見る必要はないが、どういう根拠でそんな事を言ってるんだ、この馬鹿！』

桂馬にバカなんて言われたくはない！

そんな冗談を言い合いながら（もちろん桂馬の僕へのバカ発言も冗談のはずだ）、始まったDクラス戦を僕は見守っていた。

僕は雄二から中堅部隊の部隊長に任命されていた。引き受けた覚えはないんだけど。でも、任命されたからにはきっちり仕事はこなさないと。

今は秀吉率いる先攻部隊がDクラスと激しいバトルを繰り広げている……はずだ。

はず、というのは、この場所からでは戦局がどうなっているのかはよくわからない。

ただ声だけは聞こえてくる。

戦死者は補習ーっ！！

て、鉄人！？ い、嫌だ！ 補習室だけは勘弁してくれ！ なんでも言う事を聞くから！

そうか。ならばこれから補習室でじっくりと指導を受けてもらおうか！

そ、そんな！ なんでも、と言ってもそれ以外で

貴様が言った事だ。俺もすっかりと指導してやる。終わる頃には、趣味が勉強、尊敬する人は二宮金次郎という、理想的な生徒に仕立て上げてやろう

くっ！ こうなれば、逃げて

ひっ！ 嫌だアア

(ボタン、ガチャ)

なるほど、試召戦争の雰囲気は掴めた。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

同じ部隊に配属されている島田さんへと僕らがすべき事を伝える。

「ん、なに？ 作戦？ 何て伝えんの？」

僕らがすべき事。それはただ一つ。

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

腕に関節技をきめられる。激しく痛い。一体どこでこんなテクを！？

『このバカアーッ！！』

桂馬も腕を抑えながら苦しそうにしている。

その顔を見たら、なんだかこんな状況でも少しスツとする。

桂馬は授業中にゲームしても怒られないし、物理干渉も壁など以外だったら受けないから、こういう時ぐらいしか苦しそうな顔を見る事は出来ない。

ざまあみろ。

ただ、問題点は僕の方もただでは済まないという事だ。すでに腕からミシッ、と嫌な音が聞こえたような気がする。ここはなんとしてでも島田さんの機嫌を直さなくては。

唸れ、僕の頭よ！ 最高の打開策をここに！

……来た！

努めて笑顔で、僕は島田さんに、

「し、島田さんって関節技をきめるときに、細身だから邪魔になる物がなくて良いよね」

「腕の次は足よ」

さらに力を込められる。

い、イタイいいいいっ！！！

何で怒りだしたんだ！？ 島田さんを褒めたはずなのに、さらに悪化するなんて！

まずいぞ。この力の入れ具合。……折る気だ！

本気で骨の一本を覚悟した時、

「吉井、島田。前線部隊が後退を始めたぞ！」

天は僕を見離してはいなかったようだ。

「島田さん。敵が来るから、急いで指示を出さない」と

「……そうね」

やっとのことで解放される僕。

だが、これで終わったわけではない。むしろ僕らの本当の戦いはこれからなのだ。

Dクラスとのバトル。

逃げる事は出来ない。

島田さんに対する恐怖から

ではなく使命感に駆られ、

僕は気を引き締める。

そして、決意を固めた僕の代わりに島田さんが指示を飛ばす。

「総員退避よ」

何で僕は関節技を受けなくてはならなかったんだろう。

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

いや、問題はある。

「駄目だよ、島田さん。そんな事をしたって僕らは逃げる事は出来ないよ」

「吉井……」

僕の台詞に意外そうにしながらも、見直したという風に見てくる島田さん。やだなあ、照れるじゃないか。

そんな島田さんに僕は告げる。

「誰かに先攻部隊にもう少しの間持ちこたえろと伝えさせて、前線が頑張つてDクラスをくい止めている間に逃げなきゃ。戦争で一番危険なのは逃げる時なんだから」

「それもそうね！」

というわけで、急いで誰かに前線部隊へと伝令をしてもらおう。

僕は誰を行かそうかとクラスメイト達を見渡す。

すると、ちょうどその時、本陣に配置されているはずのクラスメイト、横田君が走ってきた。

「ん？ 横田じゃない。どうしたの？」

「代表より伝令があります」

メモを見ながら、横田君がハキハキした声で告げる。

「逃げたらクロス」

「総員突撃ーっ！！」

僕らは全速力で戦場へと赴く。

足が軽い。

仲間のために戦うと思えば、疲れなんてどうってことはない。

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合点数残り40点です！」

「森川が戻ってこない！ やられたか！？」

秀吉率いる前線部隊と交代して戦い始めてから、すでに数十分。その間、様々な出来事があり、Fクラスのモチベーションはかなり上がり、奮闘していたのだが、戦力差から景気の悪い報告が次々と入り始める。

僕もここに来るまでに様々な困難に立ち向かった。

Dクラスのなんかよくわからないが島田さんに御執着だった女の子からの攻撃をかわし、錯乱した島田さんを退け、僕を生贄にしようとした須川君の策略をなんとか乗り切った。

『Dクラスより仲間のFクラスからの攻撃の方が多いいんだが』

敵はDクラスだけじゃなかったという事さ。

昔から戦争では良くあることじゃないか。

『だが、この展開。明久が幸福になる事はあり得ない』

え、何でさ？

『こういう展開もゲームで何度か見た事があるからな。どうせ最終的にはなにかしらの酷い目にあうのさ』

ゲームかい！！

そうこうしている内に僕らの部隊は残りたった5人になってしまった。

そろそろ限界だろうか。

「明久、あと少し持ち堪えろ！」

撤退を考えていると、後ろからそんな檄が飛んできた。

辺りを見回してみると、僕らの遙か後方に雄二達の姿が見えた。援軍だ！

それにしても、なんてよく通る声なんだろう。あんな遠くからでもはっきりと声が届くなんて。

あと少し持ち堪えればなんとかなる。

ついに、僕の出番が来たようだ。

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」
「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「あの、えっと……さ、^{サモン}試獣召喚です」

『Fクラス	姫路瑞希	V S	Dクラス	平賀源二
現代国語	339点	V S	129点	』

「え？ あ、あれ？」

「ご、ごめんなさいっ」

姫路が背丈の倍はありそうな巨大な剣をDクラス代表の平賀へと振り下ろす。

一切の反撃も出来ずにそのまま一刀両断される平賀の召喚獣。あれだけ装備に明らかな違いがあれば仕方のない事だろう。

こうして、Dクラス戦が決着した。

明久はと言うと、須川の策略で船越先生（数学教師 四十五歳女性独身）に狙われる羽目になり、須川を始末しようとして、黒幕の存在を知り、今度はそちらを狙っているのだが、あまりの出来事に^{バイサーカー}狂戦士と化してしまつて、一切話ができない。

ちなみに明久の召喚獣は大した活躍はしていない。まあ、できるはずもないが。

これだからバカは困る。もう少し頭を使ってほしいものだ。

喜び歓声を上げるFクラスと悲鳴を上げるDクラスを一瞥すると、僕はすぐにゲームへと視線を戻す。

おっ！

新しいイベントキターツ！

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

FクラスとDクラス、それぞれの勝鬨と悲鳴があわさり、校舎を揺らすような大音響が鳴り響く中、平賀君が呆然と呟く。

仕方ない事だろう。まさか、姫路さんがFクラスだなんて、誰が予想できただろうか。

と知った風に言っても、なんだか戦争の最後の方の記憶が少し曖昧だ。

雄二達の援軍が間に合って、一度教室に戻ったぐらいまでは覚えているが、その後何があったかよく思い出せない。

雄二が何故か僕の腕を握っていて、僕の詰めをペンチで剥がそうとしていた所からは記憶があるんだけど。

この記憶の空白はなんだろう？

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

敗戦の将か。なんだか可哀想に見える。

クラス代表とは戦争に勝利すれば、まさしく英雄のように扱われる。だが、逆に敗北すれば戦犯のように扱われる。それが宿命なのだ。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

こんな姿の平賀君やDクラスに今日中に済ませるなんてとても言えない。

一日くらい待ってあげるべきだろう。

「いや、その必要はない」

雄二の返答は予想外のものだった。

「え？ 何で？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

それが当然の事のように告げる雄二。僕には雄二が何を言いたいのかさっぱりわからない。

「雄二、何で交換しないのさ？ Aクラスには及ばないけど、一応普通レベルの設備が手に入るんだよ？」

「最初から言ってるだろう。俺達の目的はあくまでAクラスだ」

Aクラスに勝つ事。それが僕らの目標。悲願と言っても過言ではない。

「でもそれなら、何で最初からAクラスを狙わないのさ。おかしいじゃないか」

どうせ敵に回すんだから、こんなまわりくどい事をしなくてもいいと思う。

「……お前、Dクラスと戦う意味を理解してたんじゃないのか？」

「へっ？」

Dクラスと戦う理由……。

そういえば桂馬に少し説明してもらったような。それでその後、その説明が正しいのか雄二に少し質問したような。

……って、まずくないか！？

もし、この事で僕に桂馬が憑りついてる事がばれたら、僕の明るい学園生活が！

『自業自得じゃないか。まったく、いつも言っているが、僕を巻き込むなよ！』

むしろ、僕が桂馬に巻き込まれたんじゃないか！

桂馬だって悪気がないのはわかっているけど、それでも僕は憑りつかれた側だ。罪は一切ない！

「まあ、所詮明久だって事か」

どうやら僕らの心配は杞憂に終わったようだ。雄二は僕に何かが憑りついているなどとは思ってないみたいだし。

……あれ？ でも、待てよ。

雄二の台詞をよく吟味してみる。

「雄二。それって僕の事をバカにしてない？」

「当たり前だろ」

何を言い出すんだこのバカは、と言うような視線を雄二は投げかけてくる。

「昼の出来事も覚えていられないようなバカはそうはいないぞ？」

そんなんだからお前は近所の保育園児に 馬鹿なお兄ちゃん なんて愛称をつけられるんだ」

「そんな事言われた事ないよ！ 僕は意外と小さい子には懐かれるんだぞ！」

「ああ。子供は相手の内面を見抜くって言うからな。しかし、精神年齢が近い事も見抜くなんて最近の保育園児は凄いな」

「僕精神年齢はそこまで低くないよ！」

「そうか。じゃあ、小学生に呼ばれたんだな？」

「……なんだか喉が渴いてきたな」

「まさか……本当に、呼ばれた事があるのか？」

見ないで！ そんな目で僕を見ないで。

ダラダラを冷や汗が出てくる。

「と、とにかくだな、俺達はDクラスの設備に手を出すつもりは一切ない」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん条件がある」

これが桂馬も言ってた作戦ってやつだろうか。まあ、ちゃんと条件がないとわざわざ僕らが苦労した甲斐がないし。

「俺が指示を出した時に、窓の外にあるアレを動かしてもらおう。それだけだ。大したことじゃないだろう？」

雄二が指差したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、この室外機はDクラスの物じゃない。Dクラスの設備はち

よつと貧しい高校レベル。Fクラスほどではないが、それでもエアコンなんてものがついているはずがない。

置いてあるのはスペースの関係上、間借りしてある

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然ある程度教師に睨まれる可能性もあるとは思うが、悪い取引じゃないだろう？」

悪い取引であるはずがない。最低ランクのFクラスの設備で三ヶ月間過ごすよりよっぽどマシだ。

うまくやれば嚴重注意程度で済むだろう。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが……。何故そんな事を？」

平賀君が疑問に思うのも当然だろう。僕にだってわからない。

狙いはあくまでAクラスのはずなのに、何でBクラスの室外機を？

「だから、頭を使え。これもAクラスに勝つための作戦に決まってるだろ」

でも、さっさとAクラスに挑んでも良いんじゃないの？

「……ああ、そういう事か」

え？ どうしたの？

なぜか急に桂馬が一人納得したような顔で頷く。

どうでもいいけど、顎に手を当てて、考えている仕草がよく似合っている。

悔しいけど、顔はかなり整っている方だと思う。まあ、中身が駄目だけだ。

「坂本の作戦は大体読めた。確かにBクラス戦も必要だし、室外機を壊す必要もありそうだ」

作戦がわかったのなら教えてよ！

けど、雄二の考えを読めるなんて、もしかしたら桂馬は意外と頭も良いのかもしれない。

何度も思っけど、後は中身だけなんだなあ。

「いや、お前には作戦は教えない。大体、別に僕が今言わなくても、

その内坂本が言うたる』

それはそうだろうけど、やっぱりそういうのは気になるよね。

「さて、皆！今日はご苦勞だった！明日は消費した点数の補給を行うから今日のところは帰ってしつかり休んでくれ！解散！」

雄二が号令をかけると皆雑談をしながら教室へと戻って行った。

帰る用意をするのだろう。

「雄二、僕らも帰ろうか」

「そうだな」

勝てたという満足感も大きいけど、正直疲労感もある。明日から
も試召戦争は続くようだし、今日は帰っておとなしく寝るとしよう。
『疲れてる主な原因がほとんど試召戦争じゃなかったがな』

そんな事ないやい！

僕だって勝利に貢献した……………はず！

「あ、あのつ、坂本君っ」

「ん？」

教室へと戻ろうとする雄二を呼び止める声。姫路さんだ。

「姫路、どうした？」

「実は、坂本君に聞きたい事があるんです」

胸に手を当てながら興奮気味に話す彼女。大事な話みたいだ。僕は席を外した方がいいのかな。

「おう、わかった」

そう応えると、雄二は姫路さんと一緒に僕から少し離れた所で話を始めた。内容はあまり聞こえてこないし、なんというか、少し寂しい気がする。

そして、僕は思い出す。

去年。

幽霊憑きという噂が出回った僕はほとんどの人から距離を置かれた。悪気はなかっただろう。それはわかってる。

幽霊なんて見えない何かが憑いているなんて考えただけで、恐かったのだろう。僕だって逆の立場だったら、ちよつと恐い。

その時、僕はまわりの人が小声で話していると、とても不安だった。

皆が僕の事を話しているんじゃないかと恐かった。

だから、こういう風に一人残されて、聞こえない話をされると不安になってしまう。

……いけない。もう幽霊の噂はなくなったんだから、こんな暗い事を考えずに、もっと楽しくて、幸せな事を考えよう。

楽しい事、幸せな事……。

何かないかとまわりを見渡して、なにもない事にちょっと肩を落としながら、再び雄二と姫路さんを見る。

姫路さんの目はまっすぐに雄二を見ていた。僕の方は一切見ずに、余程大事な用件なんだろう。凄く集中しているように見える。

ん？ もしかして……僕は存在を認識されていない？ まさか、眼中にないとか？

幸せな事

発見！

僕は今、スカート捲り放題じゃないか！

『チャンスだぜ明久。パパッと捲っちまえよ。あんな可愛い子のスカートの中なんて、そうそう拝めるもんじゃねえぜ？』

はっ！？ お前は僕の中の悪魔！？ くそっ！ 僕を悪の道に誘惑しに来たな！ 舐めるなよ！ 僕の正義の心が負けるものか！

……………。

……あれ？ 天使は？ 僕の中の天使は！？ ちょっと、出てきてよ！ これじゃ僕には悪の心しかないみたいじゃないか！

くっ！ こうなったらもう桂馬でも構わないから、僕の天使の代わりをしてよ！

『ふざけるな！ なんで僕がお前の一人芝居に付き合わなきゃなら

んだ!」

いいじゃないか! 僕は一心同体と言っても過言じゃないだろう?

「お前と一緒にほされたくない!」

僕だって桂馬と一緒にほしたくないよ!

二人で口論。と言っても、僕は口を開けて喋ってるわけじゃないけど。

「ま、元々興味はあったが、きっかけはコイツがそんな相談をしてきたってコトだ」

僕が自分、さらには桂馬と戦っていると、いつの間にか二人がこちらに歩いてきていた。

「あの、吉井君がそんな事を言い出した理由って……」

僕の心の葛藤も知らずにつづく二人の会話。

「さて。そう言えば、振り分け試験で何かあったみたいだが、それと関係があるのかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあつた、ってコトだろ?」

茶化すように愛嬌たつぷりの笑顔で答える雄二。何かどこか誇らしげで楽しそうだ。なんの話をしていたんだろ? まさか愛の告白!? 姫路さんは雄二の事が好きだったのか!

「……どうしたらそういう結論に至るんだ?」

大事な話+姫路さんが真剣+雄二が楽しそう!! 告白!

って、感じじゃない?

僕はこれでも恋愛の機微には敏感な人間だと思ってる。だから、この考えにもちよつと自信がある。

同時にこれが正解なら、雄二を殺
じゃなくて、雄二
が死ぬほど羨ましいけど。

「こおんのバカあああーッ!」

怒鳴られた。しかも、耳元で。右耳がキーンとする。

『そんなのでエンディングが決定するなら、今頃ギャルゲーはクソゲーのトップに立つとるわ!』

桂馬はものすごい形相で怒鳴っている。そこまで言わなくても。『いいか? そもそも告白という一大イベントに到達するまでには、多くのイベントをこなしてだな』

あ。桂馬! 悪いけど姫路さんと雄二がもう大分近いから、ちよつとごめん、もう少し声を小さくしてて。

あまり騒がれると、雄二達の声が聞こえなくて、変に思われてしまつ。

色々と気をつけなければならないのだ。もう割と慣れたけど。

桂馬も渋々ながら話を止めてくれる。ただあの様子だと家に帰った後にまた言われそうだ。

桂馬は話しだすと長い。しかも、無駄に説得力がある感じでダメな人間ぶりを発揮する。ある意味、一番性質が悪いかもしれない。

「さて明久、そろそろ帰るぞ」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの?」

「ああ。これで決心も固まっただろうし、な?」

雄二が問いかけると、ボンツと音が聞こえて来そうなほどに姫路さんの顔が真っ赤になった。これは凄い隠し芸だ。

『（ああ、そういう事か）
ん?』

桂馬が何かを言った気がしたが、小声だったのでよく聞き取れなかった。何だっただんだろう?

「それじゃ帰ろうか。姫路さん、またね」

「あ、はい! さようなら!」

顔を赤くしたまま手をブンブンと振る彼女に見送られて、僕と雄二、あと桂馬は教室を後にした。

『……捲つても、いいんじゃないかな?』

え、誰？ …… つて、もしかして僕の中の天使！？ 今更！？

もうその話題はとづくに終わってただけ！ しかもスカート捲り肯定してるじゃないか！

『一人でこれだけ騒げるのも、もはや才能だな』

違うよ。これは一人芝居であつて、一人芝居にあらず。

これは天使と悪魔の壮絶な戦いで

『結局、両方ともお前じゃないか。しかもどっちも同じ意見だし。戦いなんてするはずがないだろ』

すいませんでしたあ！

今の僕に、桂馬の意見を否定する事はできそうになかった。

FLAG 3 0 Dクラス戦（後書き）

明久「そういえば、桂馬って運動はできるの？」

桂馬「バカにするな。僕に出来ない事などない」

明久「でも、ゲームばかりしてたら体力がつかないんじゃないの？」

桂馬「現実の困難など、ゲームの世界の神である僕には通用しない！」

明久「そうなんだ……（疑いの眼差し）。あ、また紙が落ちてる」

桂馬「また作者か……。いい加減に僕達を使うのは止める！」

明久「ははは……。えーと、『次は明久達が死にます』だって……
つて、ええええええっ！！??？」

桂馬「じゃあ、次回もよろしくー（棒読み）」

明久「よろしくじゃないよ！ 僕の命がーっ！！」

FLAG 3 / 5 国語

問 以下の問いに答えなさい

『吾輩は猫である』の著者、夏目漱石の作品を、『吾輩は猫である』以外で一つ挙げなさい。

姫路瑞希の答え

『坊っちゃん』

教師のコメント

正解です。他にも『夢十夜』や『こゝろ』など多くの作品がありますね。

坂本雄二の答え

『吾輩は犬である』

教師のコメント

いつから『吾輩は猫である』はシリーズ化したんですか？

吉井明久の答え

『我が肺は二個である』

教師のコメント

もはや『吾輩』ですらなくなりましたか……。

FLAG 4 0 死を呼ぶお昼時

Dクラス戦も終わり、僕は家で教科書を開いて、机の前に座っていた。

自分でも珍しいと思う。

明日あるBクラスとの戦争のための補給試験の勉強をしていた。

『明久。……お前は一体何をやっているんだ？』

「まったく、何を言っているのさ？ 明日の為の準備に決まってるじゃないか」

桂馬の目は節穴なんだろうか？

『へえ。じゃあ、この包丁は明日何に使うんだ？』

桂馬が指差したのは切れ味のよさそうな、刃渡り三〇センチほどの包丁。

「明日の戦争に」

『……じゃあ、これは？』

今度はこれまたよく砥がれた刃渡り二〇センチほどの包丁を指差す。

「それも、明日の戦争に使うんだよ」

『……じゃあ、そっちは？』

桂馬は今度は、カッターナイフを指差す。

「もちろん、明日の戦そ」

『お前は明日、何をする気だー！ーっ！ー！ー！』

桂馬が大声で叫ぶ。

明日何の戦争をするかって、……そんなの決まってるじゃないか。

「雄二を殺すのさ」

『……勉強をする気ないだろ』

何を言い出すんだ！ ちゃんと、明日の為の準備をしているじゃ

ないか！

こうやって、教科書を開いて！ 机の前に座って！ 家にある刃物の類を全て並べて！ こうやって、しっかりと砥いでいるというのに！

包丁などの下に教科書は引いてあり、たまに横目で見たりしている。

『もういい。お前にツツコンでたらゲームの時間がなくなる』

桂馬は再びゲームへと視線を戻す。

というか、これは雄二が悪いんだ。

今日のDクラス戦の後。

偶然、教科書を教室に忘れて取りに戻った僕は、そこで見てしまった。

姫路さんと、その手元に置かれた可愛い便箋と封筒を。そして、好きです の文字。

Dクラス戦の終わったすぐ後に、姫路さんと雄二は良い雰囲気だったし、間違いないだろう。

姫路さんは雄二の事が好きなのだ。

妬ま じゃなくて、羨ましい。

そして、姫路さんに別れの挨拶を告げ、家に帰って来てから、ご飯も食べずにこうしてひたすら刃物を砥いでいた。

さあ、後は明日の戦争を待つだけだ。

翌朝、いつも通り学校に向かう。

今日は試召戦争で消費した点数を回復する為にテスト漬けのはずだ。そして、雄二の命日となる日。頑張らないと！

「おはよー」

教室の扉をガラガラと開ける。

開けるたびに思うけど、この扉もボロすぎる。もう何回か開けたら崩れ落ちてしまうような気がする。

教室内の設備と言い、この扉と言い、やっぱり昨日のDクラスの設備はもったいなかったんじゃないだろうか。

「おう明久。時間ギリギリだな」

隣ですでに到着して胡坐をかいている雄二が声をかけてくる。その手には英語の教科書がある。きっと、テスト前の最後の足掻きだろう。

「……おはよう、雄二」

僕は計画がばれないよう気にしながら、挨拶を返す。

今はまだ早い。

もつと人の少ない所で。確実に殺る。

「……なあ、明久。なんかよからぬ事を企んでないか？」

なっ！？ まさか、僕のこの完璧な演技を見破ったというのか？ さすがは雄二。一筋縄ではいかないようだ。

僕は努めて冷静に、

「な、何を言ってるの力な？ 何の事ダカワカウないヤ」

「そうか。やっぱり何か企んでるのか」

馬鹿な！？

「明久。鏡を見てくるとこい。お前の顔はいかにも何か企んでいますって人の顔をしてるぞ」

そんな馬鹿なっ！？ 僕の演技は完璧なはずだったのに。

そんな僕の様子に二人は呆れているようだった。

「まあ、いい」

雄二が特に言及する事もなく、話題を変える。

あれ？ 珍しいな。いつもならここで何か聞かれるのに。……そして、なにか酷い目にあわされるのに？

「明久。今日の一時間目の数学のテストだがな」

雄二が鼻歌でも歌いそうな晴れ晴れとした笑顔になる。

それはそれは良い笑顔だった。

そして、コイツがそんな顔をするときは

「船越先生だそうだ」

僕に何かしらの不幸が訪れる時だ。

聞いた瞬間、僕は扉を開け、廊下を疾駆する。

僕の命は風前の灯だった。

「うあー……づがれた。……今日は散々だよ」

机に突っ伏す。

とりあえず四教科のテストが終了。ただでさえ、テストで疲れるのに、朝から船越先生と一悶着あって、余計に疲れた。

ちなみに船越先生には近所のお兄さん（三十九歳／独身……お兄さん？）を紹介してあげた。昨日の呼び出しもその事だったという事にしたし。

『坂本はもういいのか？』

「残念ながら疲れて、殺れる自信がない」

それに、なぜか雄二を狙わない方がいい気がする。

よくわからないが、狙おうとするとなぜか脳裏に生爪をはがされる僕の姿が浮かぶ。僕の中の何かがそれ以上は思い出してはいけな

いと告げていた。

「何をやる自信がないのじゃ？」

いつのまにか秀吉が近くに来ていた。

今日は勉強に気合をいれるためか髪形をポニーテールにしている。ううっ。僕のストライクゾーンと真ん中だ。……はっ！？ 今一

瞬、良いかもと考えている僕がいたぞ！？ 秀吉は男秀吉は男秀吉は男。

「あ、明久？ どうしたのじゃ？」

微妙に秀吉が引いている。僕の姿が異様に見えてしまったらしい。今度からは気をつけなきゃ。

『だが、そのおかげでお前の独り言は流してくれたみたいだけどな』
あ。本当だ。

これはラッキー。

いつもは心の中で会話するけど、たまに口でも会話するから、注意しなくちゃいけない。

「よし。じゃあ、さっさと昼飯でも食いに行こうぜ。今日はカレーとラーメン。あとはかつ井と炒飯にすつか」

ムツツリー二に雄二も近付いてくる。

雄二は一体どんな胃袋をしてるんだろ。それだけ食べたら確実に胃もたれすると思う。

というか、どれか一つぐらい分けてほしい。僕だってカロリーが欲しいんだ！

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒に良い？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「じゃあ、混ぜてもらおうね」

島田さんもパーティーに加わる。

これで五人。一人入れ替えないといけないか？ …… って、それはゲームの話じゃないか！

『一人でノリツツコミしてる場合か。お前ら、大事な事忘れてるぞ』
へ？ 大事な事？

「あ、あの……。皆さん……」

おずおずと姫路さんが話しかけてくる。

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

姫路さんはもじもじしながら僕らの方を見ている。どうしたんだろ？

「もしかして、弁当かのう？」

「は、はい！ 迷惑じゃなかったらどうぞ！」

と、背中後ろに隠していたバッグを出してくる。

そうだ。忘れていた。昨日、姫路さんが僕らのお弁当を作ってくれてと言っていたのだ。

とても嬉しい。おかげで僕の寿命はかなり伸びたに違いない。

「迷惑なもんか！ ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

僕らはそろって屋上へと向かう。

折角姫路さんが作ってくれてお弁当を教室の中で食べるなんてもつたいない。

こうして、僕に久々のまともな昼食が舞い込んできた。

どうしてこうなったのだろう。

僕の前では一人の友人が倒れている。

ためしに声をかけてみる。

「（ゆ、雄二？ 生きてるー？）」

「.....」

返事がない。ただの屍のようだ。

って、そんな事をしている場合じゃない！

何故こんな事になってしまったのか。そこには一つのお弁当が関係している。

島田さんとジュースを買って、戻ってきた雄二が 姫路さんのお弁当を食べた瞬間、倒れ、苦しみ出し、呻き、そして動かなくなった。

ムツツリーニも海老フライを食べて同様の反応を示していた。ただし、こちらはすぐに戻ってきたが。

もつとも、もう戦えそうにはない。真っ白な灰になっている。そう。

つまり、この惨状の原因は間違いなく、あの弁当！

その時、雄二がなんとかこちらへと視線を向けてくる。その目は訴える。

毒を盛ったな、と。

毒じゃないよ。姫路さんの実力だよ

僕も目線で言葉を返す。普段から一緒に居る僕らだからこそできる芸当だ。

『できるわけないだろ、普通』

「あ、足が……攀つてな……」

姫路さんを傷つけないように嘘をつく雄二。意外と優しい所もあるのだ。その優しさが過去、僕に向けられた記憶は一度もないが。

「あはは。ダッシュで階段の上り下りをしたからじゃないかな」

「うむ。そうじゃの」

「そうなの？ 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

事情のわかってない島田さんが不思議そうな顔をする。

どうでもいいけど、これ以上ないくらい鍛えられてるというのは鉄人の事を言うんじゃないだろうか。あの筋肉ゴリラめ。

「そういえば、島田さん。その手をついてるあたりにさ」

ビニールシートに腰を降ろしている島田さんの手を指差す。

悪いが、余計な事を言われる前にここで退場してもらおう。

「ん？ 何？」

「さっきまで無視の死骸があつたよ」

「ええっ！？ 嘘っ！ 早く言つてよ！」

ええ、嘘ですとも。

島田さんは慌てて手を避ける。この辺は女の子みだ。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方が良いよ」

「そうね。ちよつと行ってくる」

席を立つ島田さん。これでリスクは低減された。

「島田はなかなか食にありつけずにおるのお」

「ははは。まったくだね」

朗らかに笑う男三人。だが、その後ろでは必死に作戦会議が行われていた。

（明久。今度はお前がいけ！）

（む、無理だよ。僕より、雄二がいくべきだよ）

（馬鹿言うんじゃない！俺だつてもう一辺食べたらずんじまう！）

（でも、きつと姫路さんは雄二に食べてもらいたはずだよ！）

（そうかのう？ 姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが……）

（いやいや。乙女心がわかってないね、秀吉は）

（……お主にだけは言われたくないぞ）

『明久！ 絶対お前は食べるなよ！』

わかつてる！ こうなったら

「ああっ！ 姫路さん、あれは何だ！？」

明後日の方向を指差す僕。

「えっ？ 何ですか？」

姫路さんは素直に騙されてくれる。よし、今の内に！

（おらあっ！）

（はっ？ おい！ 明ひ もごおっ！？）

その隙に雄二の口の中一杯に弁当を押し込んだ。

目を白黒させているので、顎を持ってご飯を咀嚼するのを手伝ってあげる。ご飯はしっかりと噛みましょう。

「ふい、これでよし」

「……お主、存外鬼畜じゃな」

秀吉が何か言っているけど気にしない。生きる為には時に犠牲は付き物なのだ。

桂馬の方はほっ、としたらしく、嬉しそうにゲームをしていた。

やっぱり、そっちも気にしない。いつもの事だし。

雄二が更に激しく体を震わせているけど気にしない。いつもの事だし。

……あれ？ これってよく考えたら、雄二の暗殺、成功したんじゃないだろうか？

「あの、何があったんですか？」

「ごめん。見間違いだったよ」

「あ、そうだったんですか」

純粹すぎる！

こんな古典的すぎる方法に引っかけってくれる姫路さんがあるがたい。純粹すぎて心配になるけど。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ。大変良い腕じゃ」

雄二の尊い犠牲（強制）により、お弁当の中身は空に。僕らの心は（あと命も）この青空のように晴れやかだった。

「本当ですか？ 良かったです」

嬉しそうに笑う姫路さん。確かに自分のお弁当を褒められたら誰だって嬉しいよね。

微妙に罪悪感で胸がチクリと痛むが、背に腹は代えられない。僕だって、命は惜しいんだ。

「こちらこそ本当にありがとう。ね、雄二？」

倒れている雄二に水を向ける。まだ、おそらく意識はあるはず。

「う……うう……。あ、ありがとうな、姫路……」

ヤバイ。目が虚ろだ。というか、もはや死者の目だ。

そんな状態でもなんとか体を起こす雄二。流石としかいいようがない。

『しかし、坂本をここまで沈めるとは。現実にはやはり完璧キアラは存在しないという事か』

そりゃあ、何でもできる人なんてそういないよ。

もし、そんな人がいるとすれば、その人はまさしく天才。いや、

超人とも呼ぶべきだろう。

「それでですね」

姫路さんが両手を胸の前で合わせて、微笑みかけてくる。

しまった！ 出遅れた！

桂馬と話していて、話題を逸らす事を忘れていた。隣で雄二が批難の視線を向けてくる。

今は向けられても仕方あるまい。どう考えてもこの状況でそれをするべきは僕だったのだから。

僕らは、もう一度作ってきますと言い出さない事を祈る。

「実はですね」

「ごそそと鞆の中を漁る。」

良かった。また作つてくるといふ話じゃないみた

「デザートもあるんです」

really?

「ああっ！ 姫路さんあれは何だ！？」

「待て、明久！ これ以上は俺でも死ぬ！」

雄二が命がけで僕の作戦を止めにかかる。コイツがここまで本気で止める姿なんて滅多に拝めないが、それをゆつくり鑑賞している暇は今の僕にはない。

（明久！ 俺を殺す気か！）

（そうか！ 次食べたらアウトならむしろ入れるべきなんだ！）

（何で謎が解けたみたいなの清々しい顔をするんだ！？）

（いやあ。むしろ積極的に雄二に食べさすべきだという結論に至つて）

（わかった。もう喋るな。いや、俺が黙らしてやる）

（へ？ 雄二？ その振りかぶった拳は何！？）

（鳩尾を殴って気絶したお前の口の中に、あれを流し込んでやる！）

（いやあーっ！ 殺人鬼ーっ！）

あわや肉弾戦という所で、秀吉がすつ、と立ち上がった。

（ワシが行こう）

（秀吉！？ 無茶だよ！ 死んじゃう！）

（明久！ お前、俺の事は真っ先に犠牲にしたよな！？）

そりゃそうだ。雄二と秀吉では重要度が違う。主に目の保養的な面に関して。

（大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。鉄の胃袋といつても過言ではない）

確かにそうなのかもしれないけど……。あの料理がちょっと強いぐらいでなんとかなるとは思いい。

「どうかしましたか？」

「あ、いや！ なんでもない！」

「あ、もしかして……」

姫路さんが顔を曇らせる。

まずい。僕達の魂胆がばれたのか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ。すぐに取ってきますねっ」

言われてみれば、容器に入っているのはヨーグルトと果物のミックスのようなもの（材料不明）だ。お箸で食べるのは難しいだろう。スカートを翻し、階下へと消える姫路さん。しめた！ チャンスだ！

「では、この間にいたかくとするかの」

秀吉が容器を手取る。

ただデザートを食べるだけなのに、まるで戦地へと赴くかのようなそんな雰囲気漂う。

「……すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

申し訳なさに俯きがちな僕らにフツと笑いかけ、秀吉は言った。
「別に死ぬわけはあるまい。そう気にするでない」

「それもそうだね！」

「ああ！ 頼んだぞ、秀吉！」

「うむ。任せておけ。頂きます」

「ごくりとつばを一回飲んだ後、容器を傾け一気に喉の奥へと流し込む。」

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴばあっ！」

「……また一輪、花が散った。命という儚い花が。」

「……雄二」

「……なんだ？」

「……さっきは無理やり食べさせてゴメン」

「……わかってもらえたらいい。……それでいいんだ」

自称 鉄の胃袋 は白目で泡を吐いていた。

『姫路の料理と、アイツの爆発する料理。どっちが酷いんだろうな』

「……」

それよりも、桂馬が爆発する料理を食べた事がある事に驚きた。
世界は広い。

まだまだこんな料理が数多に存在するのだ。

まともに意識のある三人は空を仰ぎながら、今日も世界が平和であることを心から祝福した。

FLAG 0 死を呼ぶお昼時（後書き）

明久「今回はかなり間が空いたみたいだね」

桂馬「元々、時間がある時にやるみたいだったからな。それに作者も色々と忙しかったみたいだぞ」

明久「それじゃあ、仕方がないね」

桂馬「僕としては、このまま放っておいてくれると、ずっとゆっくりゲームができていいんだがな」

明久「えーっ!? それじゃあ、物語が進まないじゃん!」

桂馬「構わん!」

明久「もういいよ……。ちゃんと次もつづく、よね」

ネコ「もちろん、続くよ」

明・桂「何でいるんだよ!」

FLAG 4 / 5 英語

問 以下の問いに答えなさい。

『Truth is stranger than fiction』

姫路瑞希の答え

『事実は小説より奇なり』

教師のコメント

正解です。イギリスの詩人であるバイロンの言葉ですね。Truthの所はFactでも構いません。

どちらかが書ければ十分ですが、一応覚えておきましょう。

桂木桂馬の答え

『現実ゲームほど面白くはない!!』

教師のコメント

そんな断言されても。

吉井明久の答え

『真実はいつも一つ!』

教師のコメント

それはフィクションです。

FLAG 5 / 0 Bクラス戦開幕

テストも全て終了し、放課後。

「明久。Bクラスに宣戦布告してこい」

「断る！」

Bクラスへの宣戦布告だと？ そんなのどう考えてもDクラスの二の舞になるだけじゃないか！

須川君に何があつたのか。忘れたとは言わせないぞ！

「心配するな。俺を信じろ」

自信満々の顔で告げる雄二。

『騙されるなよ』

桂馬が忠告してくる。

わかつてるよ、そんな事は。

今まで何度雄二の甘言にのせられ、騙されてきた事が。

『それだけ学習してない証拠だな』

何でここでそんな事言うのさあ！

「よし。なら、じゃんけんで決めようぜ」

うーん。まあ、それなら……。

「わかった。ただし、恨みっこなしだよ」

「当たり前だ。ついでに、普通のじゃんけんじゃあ、面白くないからな。心理戦ありでいこう」

心理戦といったらあれだよな。先にグーをだす、とかって言つてその裏をかいたりするやつ。なるほど面白い。

「オツケー。じゃあ、僕はグーをだすよ」

じゃんけんの構えを取りながら雄二に告げる。

「そうか。それなら俺は」

雄二は何で来るのだろうか？

勝てるようにパー？ それとも裏をかいてチヨキ？ なんにして

も、雄二の考えを読むことが先決だ。

「お前がグーを出さなかったら、あの料理を食わす」

……はい？

「行くぞ、じゃんけん」

「えっ、ちよっ!!」

パー（雄二）　グー（僕）

「決まりだ。行つて来い」

「納得できるかああっ!!」

「なんだよ、あの料理つて！　どう考えても一つしか浮かばないじゃないか！

姫路さんの手作り料理。

おそらく雄二が言いたかったのはそれだろう。この場には姫路さんもいるから伏せたのだろうが。

だが、秀吉とムツツリー二はわずかに膝を震わせている。

そもそも、これって心理戦なのか？

「まったく。恨みつこなしなんじゃなかったのか？」

「そういう問題じゃない！」

「言つたろ。心配するな。須川のようになる事はない」

騙されるもんか！　絶対に嘘をついて僕を嵌めるつもりなんだ。

「なぜならBクラスには美少年好きが多いらしい」

「それなら大丈夫だね」

『おい!!』

桂馬が文句を言つてるけど、大丈夫だと思う。

だって、僕。美少年だもの！

「でも、お前不細工だしな」

「失礼な！365度、どこから見ても美少年じゃないか！」

この僕のどこが不細工だと言っんだ。

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

『355度、どこから見ても不細工だと認めたな』

「皆嫌いだ！」

一年間の日数365日と混ざっちゃっただけなのに、人の小さなミスを馬鹿にして！　ちくしょー！

「大丈夫だって。ちゃんとBクラスの方には事前にある程度話をし
てある。情をかけてもらえるはずだ」

「まあ、それなら信じるけど……」

ジト目で雄二を見つつ、仕方なく僕はBクラスへと向かった。

桂馬は最後まで騒いでいたけど、僕は雄二を信じる事にした。だ
って、雄二も僕の友人なのだから。

「……言い訳を聞こうか」

僕はBクラス生徒の暴行でちぎれかけた袖を抑えながら雄二を問
い詰める。

「予想通りだ」

「くきいーっ！　殺す！　殺し切るーっ！」

「落ち着け」

『「ぐふあっ！」』

鳩尾強打……。あんまりだ……。

「これもお前の為だ。あんまり怒ると、血圧があがっちゃうからな」
「微塵も情をかけてもらえなかったんだけど」

なんとか立ちあがりながら雄二に聞く。

桂馬はBクラスにぼこられてから、ずっと不機嫌そうにゲームを
していた。が、今さっきのパンチで呻いていた。

「何言ってんだ。かけてもらっただろ。非情を」

「くたばれ、雄二ーっ！」

「ふん！」

「ぶへえっ！」

『ごぼっ！』

再び鳩尾を強打される。同時に桂馬にもダメージがフィードバックする。この分だと話をしていたというのも絶対嘘だろう。

『うう……お、お前は……やっぱり……馬鹿だ……！』

恨めしそうな目で見てくる桂馬。

……悪いのは……雄二だよ。

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、さっさと今日は寝ろよ」

「うう……。腹が……」

ズキズキと痛む。ボディの効果が切れるまでは動けそうにない。桂馬はそんな状態でもなおもゲームをしようと頑張っていた。もはやすごいとしか言いようがない。

そのままの状態で僕は教室から出ていくクラスメイト達を見送る事になる。誰も心配する事なく出ていくなんで、このクラスに良心という言葉はないらしい。

しかも、姫路さんすら駆け寄って来てくれない。あれ？ もしかして、僕、嫌われてる？

首だけ巡らしてまわりを見ると、姫路さんはまだ教室に残っていた。

だが、鞆を抱え込んでキョロキョロとあたりを見回している。かなり拳動が不審だ。まるで何かを警戒しているように見える。

ああ、そういえば昨日手紙を書いていたんだっけ。

おそらく、それをどこに置くべきか考えているのだろう。

ちくしょう、雄二め！ 僕をこんな目にあわせておきながらあっ！
「よ、よいしょ……」

だけど、姫路さんに罪はない。

僕は倒れたまま、どうにか匍匐前進で教室を後にする。見ていたら悪いからね。

キンコンカーンコン

「行ってこい、野郎ども!!」

「「「「「おおおおおっ————!!!」」」」」

テストも全て終了し、昼休みの終わりを告げるチャイムが校舎に響き渡る。それはすなわち、Bクラスとの戦争の開始の合図。

姫路さんを部隊長として、Fクラスの多くが廊下を駆ける。

姫路さんが隊長ともなれば、部隊の士気は恐ろしく高い。無駄に体力をもてあました馬鹿共は猛然とBクラスの方へと向かう。

「ま、待つてくださーい」

姫路さんを置いて。

姫路さんはもともと体力が弱いことから、他の男子達の本気のダツシュに追いつけるわけがない。

大丈夫だろうか？

「姫路さん。大丈夫？」

姫路さんに合わせて、スピードを落として並走する。

「あつ、明久君。私は大丈夫ですから先に行ってください。す、すぐに追いつきますから」

そこまで言われてはどうしようもない。

「じゃあ、先に行くけど、ゆっくり来ていいからね。辛くなったら休んで」

彼女がいなければBクラスと戦うのは難しいが、だからといって姫路さんの体調が悪くなったら大変だ。

僕はスピードをあげて、戦闘集団へと追いつく。

Bクラスは文系主体のクラスなので、こちらは理系の先生達を確

保している。

が、僕がついた時には第一陣が尽くやられていた。
だが、無理もないだろう。

Bクラスともなれば、総合科目の点数ならば2000点弱ぐらいある。対して、Fクラスは平均750点といったところ。

一対一でまともにやれば勝ち目なんてあるはずがない。

「お、遅れました……。す、すみません……」

姫路さんが遅れて戦場へと到着する。これならば！

「姫路瑞希が来たぞー！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。どうやらすでに姫路さんの事はばれてい
るみたいだ。ばれてない方が色々やりやすいんだけど、そうもい
かないか。

Bクラスの人たちの目つきが明らかに変わる。よほど姫路さんを
警戒しているらしい。

「姫路さん。来たばかりで悪いんだけど、お願いできるかな？」

「は、はい！ わかり、ました」

そのままトタトタと戦場に紛れ込む姫路さん。あの姿を見ている
となんだか和むなあ。写真を取って額縁に入れて壁に飾つときたい
ぐらいだよ。

『そこまでするか……』

当たり前じゃないか！ だって姫路さんだよ！？

「岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！ そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

あれ？ どうやら見ていない内に姫路さんの召喚獣がもう相手を
倒したらしい。まあ、姫路さんは早く潰したい相手だろうから、向
こうから攻めてきたんだろう。

でも、それを返り討ち。二人同時にだなんてやっぱり姫路さんは
凄い。

『どうやら腕輪持ちみたいだな』

腕輪？ 姫路さん、そんな物つけてたっけ？

『召喚獣の方だ。そんな事もわからないのか。だから バカなお兄ちゃんなんて呼ばれたんだろ』

違う！ あれはあの子の親愛の表現の一つで、僕がバカだからつけたんじゃないんだよ、きつと！

それより、召喚獣に腕輪？ ああ、そういえば高得点の人にだけつけられるっていう特殊能力があつたっけ。

確か400点越えが条件のはずだから、姫路さんはそれを超えているという事になる。どれだけ頭が良いんだろ。僕の召喚獣では永遠に押めない数字に違いない。

「姫路さん、とりあえず下がって」

腕輪の能力は大きく点数を消耗すると聞いている。あまり戦わせるのは酷だろう。

それに、姫路さんのおかげで相手の士気はガタ落ち。逆にこちらの士気は

「やつたるでえー！！」

「俺達の真の力を見せてやる！」

「姫路さん、サイコー！！」

「姫路さん、愛してます！」

後半になるにつれて姫路さんへのラブコールが多くなっていく。言った奴らは後で一発ぶん殴っておこう。

だが、それでも士気の差は歴然。相手の前線の崩壊も時間の問題だろう。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退。戦死だけはするな！」

そんな相手の指示が聞こえてくる。いくら一人一人の点数が高くても、数で押せばなんとかならない事もない、はず。そして、僕らの狙いは相手をBクラスまで下がらせる事。この分だと今日は教室内に押し込んだ所で終了となるだろう。ここまで計算通りに行くのも姫路さんがいてこそ。感謝感謝。

「明久、ワシらは教室に戻るぞ」

戦況を眺めていた僕の所に秀吉がやってきた。

「Bクラスの代表じゃが……」

「うん」

「あの根本らしい」

「へえ。……誰だっけ？」

「人の名前すら覚えられんのか!？」

そんなこと言われても、忘れちゃったもんはしょうがないし……。

桂馬、知ってる？

『知らん』

だよねえ。

「根本恭二。去年から何かと評判の悪かった奴じゃ」

「ああ、そういえば」

カンニングは常連らしいし、卑怯な事ばかりする奴って事で有名だったはず。

「雄二になにかあるとは思えんが。用心に越したことはないじやろ
う」

姫路さんに一言報告すると、僕と秀吉は数人を引き連れて教室へと戻った。

「うわ。こりゃ酷い」

「まさかこう来るとはのう」

教室に引き返した僕らを出迎えたのは、穴だらけになった卓袱台やへし折られたシャープや消しゴムだった。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「そうじゃな。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃ」

『レベルは小学生だけだな』

僕もそう思う。なんていうか……器が小さい。

「あまり気にするな。作戦に支障はない」

「雄二がそう言うならいいけど。どうして教室に居たのに気づかなかったの？」

昼休みにはこんなことにはなっていなかったのだから、戦闘開始から今までの間にやられたのだろう。それならば、教室に居た雄二が気づかないはずがないのだが。

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空けてたんだ」

「協定？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁じる、つてな」

という事は、その間にやられたのだろう。けど、わざわざそんなことのために協定を結んだのだろうか？

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方にはこっちには有利じゃない？」

「姫路以外は、な」

「あ、そうか」

さつきも前線部隊の走る速度についていけてなかったし、姫路さんの体力は決して多くはないだろう。だが、姫路さんは僕らの切り札。失えばそれだけで敗北は必至だ。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうなると、必要なのは姫路個人の戦闘力だ。それがなければ俺達に勝ち目はない」

局所的な戦闘になるという事だろうか？ それともDクラス戦の時みたいに姫路さんに倒してもらうとか？

「だから受けたの？ 姫路さんが万全の状態で戦えるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

そっか。それならいい。

けど、逆に何か引つかかる。卑怯と名高い根本君がそんなお互い対等な条件を出してくるだろうか。僕にはとてもそうは思えない。

「明久、ワシらはとりあえず前線に戻るぞい。向こうでも何かさわれているかもしれない」

「わかった。雄二、後はよろしくね」

「ああ。シャーペンと消しゴムの手配をしておこう」

手をあげる雄二に背を向け、僕は先に出た秀吉の後を追って走り出す。

そこまで全力で走っていなかったのかすぐに追いつくことができた。

「なんかまだ色々やってきそうだね」

「そうじゃな。この程度で終わると思えん」

まったく。そっちの方が点数だつてクラスだつてずっと上なんだから正々堂々ときてくれてもいいのに。

僕はチラリと桂馬を見る。いつも通り絶賛ゲーム中。

こういう時に桂馬が協力的だったらなと思う。

詳しくは知らないけど、桂馬は頭が良い。知恵を貸してくれば、雄二と協力してもつと良い作戦や、根本君の考えも読めると思う。

だけど、桂馬にその気はまったくない。それはわかってる。

わかってるけど、

「少しぐらい協力してくれてもいいのに」

「？ 何か言ったかの？」

「いや、何でもないよ」

っと、そろそろ戦場が見えてきた。

「では、くれぐれも用心するんじゃぞ！」

「秀吉もね！」

互いに警告し合い、それぞれの部隊に戻る。

「吉井！ 戻ってきたか！」

出迎えてくれたのは須川君。あれ？ 僕の部隊は今は副官の島田

さんが指揮をとっていたはずだけど。

「待たせたね！ 戦況は？」

「かなりマズイ事になってる」

「え！？ どうして！？」

最後に見た様子ならば、負ける事はないと思っていたが。

「島田が人質に取られた」

「嘘だね」

「何でだ！？」

あの島田さんが人質にそんな馬鹿な。そんな事をすれば命の灯を
一瞬でかき消されるに決まってる。

「いや、本当なんだって！」

必死で訴えかけてくる須川君。

ということはまさか、

「まさか、本当に島田さんを入質に取るなんて」

人質なんて卑怯な手段の王道だが、まさか試召戦争で見られるとは思わなかった。

「……とりあえず状況が見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川君が前を歩き、僕がその後につづく。

部隊の人垣を抜けると、そこには二人のBクラスの生徒と捕えられた島田さん、そして彼女の召喚獣がいた。

そして、そばには補習担当講師（鉄人）もいる。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

おおー。なんだかドラマみたいだ。

「なんで感動してるんだ、吉井」

「だってドラマみたいだから」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

島田さんが怒鳴ってくる。人質はおとなしくしてないといけない
というのに。

「おい、お前ら。それ以上こっちに来るんじゃないぞ。コイツを補習室送りにはしたくねえだろ」

島田さん捕えている敵の一人が僕を牽制してくる。

卑怯なやり方だが、同時に上手いやり方だ。クラスに二人しかない女子の一人をすぐに倒すのではなく人質にすることで、こちらの士気を挫くのに一役買っている。

さらには、このまま攻め込めば島田さんは相手を倒す前に補習室送りにされて、酷い補習じゅうもんを受ける事になるだろう。そんなのは……別に良いんじゃないかな。

「総員突撃準備ーっ！」

「よし。皆突撃準備だー、ってそれで良いのか、吉井!？」

「戦争に犠牲は付きもの。個人が勝っても、クラスが勝たなきゃ意味がないんだ！」

そう。これはクラスの為。決して日頃痛めつけられている恨みを晴らしたいがためではない！

「ま、待て！ 吉井！」

敵からちよつと待ったコールがかかる。往生際の悪い人たちだ。

「どうしてコイツが俺達に捕まったと思ってる？」

「バカだから」

「殺すわよ」

なんだか殺気だけで殺されそうなほどなんですけど。

「コイツはな、お前が怪我をしたっていう情報を流したら、一人で保健室に向かったんだよ」

「島田さん……」

「な、何よ？」

島田さんの顔は心なしか赤い。

「副官なのに部隊長の動向も知らないなんて。やっぱりバカだから捕まったんじゃない」

「一本も残さず殺すわ」

囚われの身でなんて殺気を!？ というか、一本も残さずって何

を！？ 腕と足？ それともまさか、骨！？

「アンタが倒れたって聞いたから、心配して見に行こうとしたのよ！」

島田さんはやけくそ気味になって叫ぶ。その顔は先ほどよりも明らかに赤くなっている。

「島田さん。それ本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

あの島田さんが僕の心配を……。そうか、あの島田さんが。

「へっ。やっとわかったか。わかったらおとなしく」

「総員突撃ーっ！」

「なんでよ、吉井！？」

そんなこと、決まってるじゃないか！

「あの島田さんは敵だ。変装している敵なんだ」

島田さんに僕を心配するなんていう優しさがあるはずがない。嬉々として僕を殴りにくるに決まってる。だって趣味が僕を殴る事なんだよ？ 変装する相手を間違えたな！

「追い待てって！ コイツ本当に本物の島田だって！」

狼狽するBクラスの生徒。

「黙れ！ いつまでもそんな見破られた作戦にすぎるなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に」

ぎゃあああああっ……」

「嫌だあああああっ……」

まずは死にかけの二人を撃破して、近くに居た鉄人に連れて行ってもらう。良い気味だ。

さて、あとは

「気をつける、皆！ 変装を解いて襲いかかってくるぞ！」

この島田さんモドキだ。しかし本当によく似ている。本物そっくりだな。中身以外。

「よ、吉井、酷い……。ウチ、本当に心配したのに……」

「まだ演技を続けるか！ この大根役者め！」

島田さんはそんな台詞を吐いたりしない！

「ウチ、吉井が瑞希のパンツを見て鼻血を出して倒れた、って聞いて心配したのに」

「皆、ご苦労だった。包囲中止。コレは本物の島田さんだ」

こんなウソに騙されるのは彼女以外にはいない。
ぞくり。

あれ？ なにか今、背中に悪寒が。

「島田さん、大丈夫だった？」

「……………」

素直に僕の手には握まり、立ち上がる島田さん。珍しい。

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……………」

「疲れたでしょ？ 教室で休んでくるといいよ」

「……………」

「にしても、酷い事するね、Bクラスの連中。人として恥ずかしくないのかな？」

「……………」

「あ、それとね、島田さん」

「……………何？」

やっとの事でリアクションが返ってくる。

こちらを向いてくれた彼女へのお礼も込めて、僕はできる限り最高の笑顔を作る。

「僕、本物の島田さんだって最初から気づいていたんだよ？」

「死になさい！！」

あれ？ 島田さんが鬼の形相で迫ってくる。あ、僕天井の方を向いている。いつの間？

『あ、明久！ は、早く逃げろ！』

へ？ 逃げるって何から？

『ぐふっ！ こ、この馬鹿、ぶべっ！ 自分が…………ごふっ！ 殴られてる事にすら、ばばあっ！ 気づいてない！ ぶばあっ！』

え？ 何を言ってるのか聞こえないよ？

……つて、ぎゃああああああああああああああああ！！！！

「い、今気づいたのか……」

あれ！？ 僕、いつの間にこんなにボコボコにされてるの！？

「し、島田さん。何するのさ!？」

「まだ生きてるのね」

さらに殴る勢いが悪化する。

まずい。意識が飛びそうだった。

「や、やめてよ、ぐえっ！ 島田さん！」

ピタッ、と島田さんの手が止まる。良かった。どうやら通じたみたいだ。

「取引よ」

取引？ 何と何を？ 僕の命に匹敵するようなものなんてあったらうか？

だが、ここでしくじれば僕の命は塵と化してしまっただろう。なんとかして成功させねば。

「まずは呼び方から変えてもらいましょうか。ウチはアンタの事
アキ　って呼ぶから、アンタはウチの事　美波様　って呼びなさい」
「なんだか簡単な取引。これならば生き残れる！」

「も、もちろんです、美波様！」

「今度の休み、駅前のラ・ペディスでクレープ食べたいな」

「おのれ！　僕が毎日塩水で生活しているというのになんという贅
 沢を　ぐぼあつ！！　すいませんでした、奢らして頂き

「ますから！」

これで僕の今月の食事は水に決定だ。だが、今死ぬよりはマシだろ。

「最後に」

「まだあるの!？」

これ以上僕のお金を使う事になつたら僕の食事は公園の水道水に

なってしまう。

「ウチの事を愛してる、って言ってみて？」

「ウチの事を愛してるーっ！」

一字一句間違えず復唱する。これで文句ないだろう！？

「……私がバカだったわ」

急に自分を責め始める美波様。どうしたのだろう？

まさか、さつき捕まった事を責めているのだろうか。

ここはちゃんとフォローしないと。

「別に美波様が悪いわけじゃないよ。ただ美波様の頭がちょっと悪かっただけさ」

殺されかけました。

「……ここはどこ？」

目を覚ますと汚い天井が目に入った。という事は、ここはFクラスの教室か。

「あ、気がつきましたか？」

近くから可愛らしい声が聞こえてくる。こんな声を出せるのは姫路さんに決まってる。

「心配しましたよ？ 吉井君たら、まるで誰かに散々殴られたような怪我をして倒れているんですから」

それ正解。

「いくら戦争だからって、本当に怪我をする必要はないんですよ？」
いや、あれは戦争というより一方的な虐殺だったような……。

しかも、戦争は敵とするものだけど、僕がやられたのは味方からだ。

「ちょっと色々あってね。それで戦争はどうなったの？」

なんとか横たわっていた体を起こす。節々が猛烈に痛い。

桂馬はもうすでに起きてゲームをしている。なんて回復力だ。

「今は協定通り休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「予定通り教室の前まで追い込んだが、こちらの被害も少なくないむしろ、予定通りにできただけでも上出来だろう。それほどまでにBクラスとFクラスでは戦力に差があり過ぎる。

廊下戦だって、向こうは戦力の一部を出してきたのに対して、こちらはクラスのほとんどをつぎ込んでいる。

「……………報告」

いつの間にか近くに来ていたムツツリー二。

今日のムツツリー二は戦闘には参加せず、周囲を警戒していた。すなわち連絡係だ。

「どうだ？ なにかあったか？」

「……………Cクラスが戦争の準備を始めている」

Cクラスが？ 何でまたこんなタイミングで。

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい奴らだ」

僕らとBクラス。勝った方に攻め込むつもりなのだろう。これも汚いが戦争の手段の一つだ。だけど、Bクラスといい、Cクラスといい。汚い事が好きなクラスが多いなあ。

「雄二、どうするの？」

「んー、そうだな」

チラリと時計を確認する。今の時刻は四時半。まだそんなに遅い時間じゃない。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言えば大丈夫だろ」

「それに、僕らが勝つとは思ってないだろうしね」

Cクラスが僕らと協定を結ぶのはそれほど難しい話ではないだろう。

「それじゃ、行ってくるか」

「そうだね」

痛む体に活を入れて立ち上がる。うん、もう普通に動ける。

『ダメだ、行かない方が良い』

僕の気持ちに水を差すかのように桂馬が僕を止める。

『坂本にも伝えろ。これは罠だ』

罠？　なんでそう言い切れるのさ？

『お前は忘れたのか？　坂本は根本と試召戦争に関する一切の事しないという協定を結んだはずだ。このままいけばそれを破ることにもなりかねない』

確かにそうかもしれないけど、でもCクラスとだよ？　Bクラスは関係ないし。

桂馬の言葉を信じきれない僕に桂馬は自信満々な顔で告げる。

『ゲームならば間違いなくBクラスとCクラスが手を結んでいる展開だ！』

理由があまりにも不純だった。

でも、同時にそれは僕にとって信用に値する情報となる。

桂馬がこう言った時は意外と当たるのだ。

「ねえ、雄二。やっぱり行くのはやめといた方がいいんじゃない？」

「ああ？　どうしてだ？」

雄二は困惑の表情を浮かべる。当たり前だろう。さっきまで僕は協定をCクラスと結ぶ事に賛成していたのだ。それが急に意見を変えるんだから驚いて当然だ。

僕はさっき桂馬から説明された事を述べる。もちろん、桂馬からの入れ知恵という事は伏せて。

「なるほど、分かった」

よかった。雄二も桂馬の意見を認めてくれてみたいだ。

「お前がこんな所にまでゲームの話を持ちだすほどダメになってい

るのはよくわかった」

「へ？」

しまった！ 理由の所で、そのまま ゲームであつたから って言っちゃった！

まわりの皆から軽く引かれる僕。違うんだ、これは僕の考えじゃないんだ！

だが、そう言うわけにもいかない。僕はこの状況をあまんじて受け入れるしかない。くそう……。

「だが、理由はともかく、お前の意見はもっともだ。それならば、根本がこちらに有利な協定を結んできたのにも納得がいく」

雄二は顎に手をあてて何事かを思案する。僕らはその様子をじっと見る。

しばらくして、雄二は顔をあげると、

「今日、協定を結びに行くのは止める」

「でも、そうすると、Cクラスの連中はどうするのじゃ？」

僕の意見が通るという事は、Cクラスを放っておくという事になる。

本当はそこをどうするのか桂馬に聞きたかったんだけど、桂馬はさつさとゲームの世界に戻っちゃうし。

「安心しろ。俺に考えがある」

「考え？」

「ああ。だが、それは明日やる事だ。今日はもう解散だな」

そうして、僕らは帰路へとついた。

明日の戦争。必ず勝たなければ！そうして、気合いを保持したまま、その日の夜は更けていった。

FLAG 0 Bクラス戦開幕（後書き）

明久「今思ったんだけどさ。題名でFLAGってあるけど、全然物語とは関係ないよね？」

桂馬「どうせ作者が何も考えずに書いてるんだろ」

ネコ「失礼な！ちゃんと物語が進めば問題なくなるよ！」

桂馬「そこまで持つかな」

ネコ「持たせる！」

明久「じゃあ、僕らもそこまで頑張らなきゃね」

桂馬「はあ。仕方ないか」

FLAG 5 古文

問 以下の問いに答えなさい。

『ラ行変格活用 of 動詞を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『あり をり はべり いますがり』

教師のコメント

正解です。ラ変の動詞はこの四つだけなので活用形までしっかり覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『変身 変顔 変人 変態』

教師のコメント

違います。どこにラがあるのですか？ それに、左に行くことに人としてダメになっていくのはなぜですか？

吉井明久の答え

『あら あり ある あれ あり』

教師のコメント

何ですか、これは？

「明久、よくやった!」

教室に入った瞬間、なぜか雄二に褒められた。

珍しい、なんてもんじゃない。コイツが素直に僕を褒めるなんて、何か裏があるに決まってる。

僕は辺りをくまなく見回す。

「どうした、明久。そんなにキョロキョロして」

「畳の下から竹槍が生えてくるのか? それとも、後ろ手にナイフを?」

トラップをいち早く感知する事。それが僕の命を救う唯一の手だ。

「何馬鹿な事を言ってるやがる?」

「だって雄二が僕を素直に褒めるなんてあるわけ」

「おい、誰か船越先生に明久が呼んでると報せてこい」

「僕が悪かった」

友達の事を信じない奴はクソだよな

「で、僕なにかやったっけ?」

僕が何かした覚えはほとんどない。部隊長として最低限の働きはしているつもりだが、特別感謝されるほどのものではない。

僕の様子を見て雄二は呆れたようにため息をつく。

「昨日、お前はCクラスに行かない方が良いと言っただろう」

そういえば、そんな事を言っただけがする。もっともあれは僕の意見じゃなくて、桂馬の意見だけだ。

僕には何で桂馬がそんな事を言ったのか、説明されても正直あんまり理解できなかった。

雄二は楽しそうに笑いながら、

「Cクラスの代表と根本は付き合っているらしくてな」

何っ!? 根本君が付き合っている? くそう、何で根本君なん

かが！

僕は世の中の理不尽を呪う。

『お前の方がよっぽど良い状況じゃないか』

へ？ どゆ事？

『……もういい』

桂馬は呆れたように、ゲームへと視線を戻す。

何を言っているんだろう？

「昨日、お前の言った通りCクラスで根本が待ち構えていたのさ。俺達が出来なくてあいつは一日中Cクラスで待ち続けたってわけだ」
くつくくつ、と悪人のように笑う雄二。

いや、悪人だったつけ。

「でも、Cクラスの方はどうするの？」

根本的な問題は解決していない。

Cクラスが本当に戦争の準備を始めたらずいことになる。

僕らFクラスが勝つとは思ってはいないだろうけど、それでもこの後Cクラスと戦うことになれば、勝つのは容易ではないだろう。

「それについてはもう手を打ってある。そろそろ帰ってくる頃だろ」
雄二が教室の扉に目を向けると同時に、タイミング良く扉が開く。
そこにいたのは、

女子の制服に身を包んだ秀吉だった。

「ムツツリー二っ！！」

「……………ッ（パシャパシャっ！！）」

ムツツリー二は僕が言うまでもなく、ひたすらシャッターを切り続けていた。

「お主ら、そんなにじろじろ見るでない」

秀吉は男。わかってるさ。でも、僕の中の何かがざわつくんだ。
秀吉はすぐにいつもの男子用の制服に着替える。

ああ、残念……。

ムツツリー二は秀吉の着替え中に鼻血を出して倒れていた。大丈夫だろうか、データは。

「それでどうだった、秀吉」

「うむ。成功じゃ」

成功？

『坂本が言つてた作戦だろ』

ああ、そう言う事か。

秀吉には木下優子さんという双子の姉がいる。彼女の所属はAクラス。成績トップクラスの優等生だ。

おそらく秀吉はその木下優子さんに為りすまして、Cクラスに何かしたんだろう。そうすれば、CクラスはAクラスを狙うだろうか。僕らは安全になるわけだ。

『明久、何か悪い物でも食べたか？ ……いや、逆か。食べてないからか』

何が？　なんか僕おかしなこと言った？

『お前がそこまで理解できるなんて。明日は雪だな』

そこまで馬鹿じゃないよ！！

あいかわらず桂馬はひどかった。僕の心をぐさぐさと痛めつけてくる。

「さて。もうすぐ、戦争の再開の時間だ」

後十分で戦争の再開。ここが勝負所だ。

「ねえ、桂馬。気づいた？」

戦争が昨日中断されたBクラス前から再開され、僕らは進軍を開始した。

雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込めろ』とのこと。

そんなわけで指令を遂行しようとしているわけだけど、ここで問題が一つあった。

『ああ。……このゲーム。前作がクソだったのに、今回かなり良くなってる。何があったんだ？』

違う！ 僕が言っているのはそんな事じゃない！

僕が気づいた事。

姫路さんの様子がおかしい。

本来は総司令官であるはずの彼女だが、なぜか今日は一切指示を出さず、それどころか戦争に関わろうとしないようにしているようにすら見える。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

よって、今指示を出しているのは秀吉。雄二からの指令を遂行するため奮闘している。

今はなんとか戦力が拮抗している状態だが、姫路さんがこの状態ではすぐに押され始めるだろう。

今の内に姫路さんの状態を確認しておかないと。

「姫路さん、どうしたの？ どこか具合でも悪い？」

「そ、その、なんでもないですっ」

顔を左右に大きくブンブン振る姫路さん。その動きに合わせて髪が大きく広がる。あまりに大きな動作でなにかあるのが見え見えだ。姫路さんは嘘が下手みたいだ。

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし」

「本当になんでもないんですっ！」

そう言う姫路さんの顔は泣きそうだった。これ以上聞くのは酷だろう。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうしたのじゃ！」

「Bクラスに拉致された模様！」

拉致、ってもう本当の戦争みたいだ。

だが、そんな事を思っている暇はない。

Bクラスは文系を得意とする人が多い。そんな中で現国に変えられたら結構ピンチだ。

「私が行きます！」

そう言つて、姫路さんが前線に加わろうと駆けだした。けど、

「あ……」

急にその動きを止めて俯いてしまった。

なんだろう。

今何かを見て動きを止めたようだったけど

姫路さんの見ていた方を目で追つてみる。

そこには窓枠にもたれながら腕を組んでこちらを見ている卑怯者

根本君の姿があつた。

その手何かを持っている。

「っ！」

根本君が手に持っている物。

何の変哲もない、手に入れようと思えばいくらでも手に入る物だけど、逆にいくらお金を出しても変えない物でもある。

彼が手にしていた物。

それは教室で姫路さんが一生懸命書いていた手紙を入れた封筒だった。

「……なるほどね、そういうことか」

桂馬が説明してくれたBクラスの協定の狙い。あれは正解だけど、まだ続きがあつたんだ。

姫路さんを無力化できれば、教室の前でBクラス総出で僕らFクラスを潰せる。上手いやり方だ。だが、あまりにも、汚いやり方だ。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。無理して

もつと体調が悪くなったらいけないからね」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ……！」

姫路さんはまだ何か言いたげだったけど、気にせず背を向けて駆け出す。大事な用ができたから。

「面白い事してくれるじゃないか、根本君」

思わずそんな言葉が口から洩れる。

あの野郎、ぶち殺す！

「雄二っ！」

「うんっ？ ああ、明久か。どうした？ 便所か？ 教室でするかー？」

雄二は何かをノートに書き込んでいる。近づいてみると、それは僕らの今の戦力図だった。

「頼みがあるんだ」

「……何だ？」

今は雄二のジョークに付き合っている暇はない。雄二もそれを察してくれたように真剣な顔で僕の方を向く。

「僕、根本君（の制服）が欲しいんだ」

「……………」

「あれ？ 雄二？ どうしてそんなに僕から距離を取るの？」

何かおかしいことを言っ

『「制服」が抜けてたな』

しまったあああああっ！！ これじゃあ、ただの変態じゃない

か！

「ち、違うよ！ 本当は根本君の制服が欲しいんだ」

「……………そうか」

さらに距離が遠ざかった。

何でだ、って結局この台詞でも僕が変態と思われる事に変わりはないんじゃないのか！？

でも、事情を話すわけにもいかないし。

「…………まあ、勝利の暁にはそれぐらい何とかしてやってもいいが」
あれえ！？ こんな簡単に受け入れられるなんて僕どういう風に思われてるの！？

ちくしょう！ 弁明したくてもできないし、受け入れるしかないのか…………。

「で、それだけか？ ならさっさと部隊に戻れ」

呆れた人を見るように。というか、残念な人を見るように僕を見る雄二。見ないで！ 僕をそんな目で見ないで！

だけど、それを気にしている暇はない。用件はもう一つあるのだから。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外してほしい」

「理由は？」

「理由は言えない」

無茶苦茶だ。自分でもわかってる。

姫路さんは僕らの切り札だ。彼女がいない状態でBクラスに勝つなんて、間違いなく不可能だろう。

要は自殺行為だ。

しかも、頼みを言うだけ言って、その理由は言わない。

僕が雄二の立場だったら、こんな申し出は絶対受けない。なにせ得る物が何もないのに、リスクだけは満載なのだから。

「頼む、雄二！」

僕は頭を下げる。

でも、この頼みを曲げるわけにはいかない。

顎に手を当てて考える雄二。

「……いいだろう。ただし、姫路が担う予定だった役をお前がするんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

力強く言う雄二。よほど大事な役割らしい。

「わかった。必ず成功させる！」

雄二はニツと笑うと、

「良い返事だ」

「それで僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。ただし！ 仲間の援護なんてないし、Bクラスの出入り口は今のままだ」

「難しい事を言ってくれるね」

難しいなんてもんじゃない。僕の成績でそれをしると言われれば、百人に百人が不可能と言うだろう。

根本君にたどりつくには、圧倒的火力がいる。

姫路さんにはあっても、僕にその火力はない。

「それじゃ、うまくやれよ」

考え込む僕を追いて、雄二は立ち上がりどこかへ行こうとする。
どこへ行くんだろう？

『大方今がDクラスに指令をだすタイミングなんだろう』
という事は室外機の件か。

それより、どうしよう。どうやって姫路さんの代わりを……。

「明久」

教室を出る直前、雄二が振り向かず背を向けたまま話す。

「お前は馬鹿だ。だが、お前にも秀吉やムツリー二のように秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「雄二……」

「噂に耐えるよりは簡単だろう？ やってみせろ、明久」

そう言い残し、雄二は教室を後にした。

僕の秀でてる部分……。なんだろう？

僕だけにしかない事……。

「……あ」

あった。優れてるわけじゃないけど、僕だけができる事。これならば根本君に攻撃を仕掛ける事ができる。

でも、問題がある。桂馬だ。

「桂馬」

僕は声に出して呼ぶ。

『やる事はわかってる。もちろん答えはNOだ』

だよねえ。でも

『ほら、これを持ってる』

そう言つて、桂馬は僕へと何かを投げってくる。

僕は寸での所でキャッチすると、手の中の物を見る。

それは桂馬がプレイしていたPFPだった。

『落としたら壊れるからな。失くさないように持ってるよ』

……………。

「ありがとう」

『何の事だ？』

桂馬は素直じゃない。

これで覚悟は決まった。後は実行するだけだ！

「没収だ」

僕の手の中にあつたPFPがなくなる。

後ろを見ると、そこにはゴリラ

じゃなくて鉄人の姿

があつた。

おそらく、偶然教室の前を通つたのだろう。そして、僕の手の中のPFPを見つけた、と。

「戦争中だから指導は勘弁してやろう」

そのまま鉄人は教室を出ると、去っていった。おそらく補習室へと戻つたのだろう。

「……………」

さあ、作戦開始だ！

『その前に僕のPFPをどうしてもしてくれるんだーっ！！！』

「二人とも本当にやるんですか？」

Dクラスに立会人として呼ばれた英語教師の遠藤先生が僕らに尋ねる。

「はい、もちろんです」

「このバカとは一度決着をつけなきゃいけなかったんです」
お互い有無を言わせぬ口調で言い切る。

今、僕はDクラスで美波と向かい合っている。

「ちなみに美波様、ではなく美波と呼ぶようにと言われた。何で？
……わかりました。お互いを知るための喧嘩もまた教育でしょう」
大きく息をついてそう告げると、遠藤先生は僕らから少し距離を取った。

これで召喚ができる。

腹に力を入れて声を出す。

「^{サモン}試獣召喚っ！！」

学ランに木刀という、どこのヤンキーだよといった感じの召喚獣が姿を現す。同時に美波の方からもサーベルを持った軍服姿の召喚獣が姿を現した。

「行けっ！」

美波の召喚獣に、僕の召喚獣が向かっていく。

僕はもう一人の僕に、木刀と一体になれと言わんばかりに強く拳を握りしめさせる。

そして、壁を背にした相手に、駆ける勢いを乗せて思いっきり拳を振るった。

今だけは僕は僕が 観察処分者 であつた事に感謝してもいいと思う。

ドン！

「『ぐ ううつ！』」

僕に、そして桂馬に痛みがフィードバックする。

僕の召喚獣の拳は美波の召喚獣が避けた事で、後ろにあつた壁に激突していた。

「まだまだあつ！」

「お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがつて。暑苦しいことこの上ないつての」

根本がこちらへと嘲笑を浮かべながら話す。

だが、根本の戯言に付き合う気はこちらには毛頭ない。

「どうした？ 軟弱なBクラス代表様はギブアップか？ まあ、昨日はわざわざCクラスに放課後ずっといたみたいだしなあ」

だから、俺も向こうを挑発してやる。

作戦の時間まで後三分。

俺は明久を信じて待つただけだ。その時間稼ぎの為に、わざわざ俺も含めて本隊が出てきたんだから。

「はあ？ ギブアップするのはそっちだろう？」

「無用な心配だな」

やはり今の状況では動じないか。

「そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「……お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

明久が言っていたから予想は付いてたが、完璧に姫路を無力化されてるな。

俺は姫路の方を見る。

そこには今にも泣きそうな顔をしながらも、Bクラス相手に奮闘するFクラスの奴らを心配そうに見ている少女がいた。

おそらく今、心中では自分を責めているのだろう。

「けっ！　口だけは達者だな、負け組代表さんよ！」

「負け組？　それがFクラスの事なら、もうすぐお前が負け組代表だな」

俺の言葉は強がりだ。

はつきり言って、このままならものの数分で押し返され、そして負けるだろう。

だが、俺達は勝つ。

俺は明久を心から信じていた。

「お前はやつちやいけない事をした」

「何の事だか」

「別に俺が怒ってるわけじゃない。ただ」

心の中はおそらくマグマのように煮えたぎってる事だろう、アイツは。

「あんまりバカをなめない方がいい」

「けっ！　言ってる！　どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

……時間だ。

「態勢を立て直す！　一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

言ってる。ここから俺達の役目は終わったんだよ。

後は

「後は任せたぞ、明久」

もう四度壁に拳を叩きつけている。僕の拳からは血が滴り落ちていた。

『ぐ……うつ……』

桂馬からも痛々しい声が聞こえてくる。

「アキ、そろそろよ」

「うん、わかってる」

周りに集まっている数人のFクラスの皆にも目配せをする。皆が頷いてくれる。

「二人とも何をしようとしているのですか？」

遠藤先生もさすがに僕らの行動に疑問を感じたのだろつ。僕らを交互に見る。

僕らの偽りの勝負を怪しんで召喚獣を戻される前に決着をつけなければならぬ。

「おおおおおおおっ!!」

腹の底から力を込めて叫ぶ。

五度目で決める。この先はない。

「後は任せたぞ、明久」

壁の向こうから雄二の声が聞こえた。

午後三時ジャスト。作戦開始だ。

「だああーっしやあーっ!!!」

召喚獣に持てるすべての力を注ぎこむ。

腕の神経が悲鳴をあげる。

美波との勝負は方便にすぎない。DクラスとBクラスは隣接して

いる。

そして、僕の召喚獣には物理干涉能力がある。
ならば、やれる事は一つ。

ドゴオツ!!!

豪快な音を立てて、Bクラスへ続く道が生まれた。
違う、僕が作った。

「ンなっ!?!」

崩れた壁の向こうには僕らの狙いであるクソ野郎が、驚き引き攣
った顔をしている。

向こうの戦力は雄二率いる本隊を追って教室から出ている。
向こうの主戦力はいない。ここを逃せば勝ちはない!

「くたばれ、根本恭二っ!」

僕らは呆気にと取られている根本君に勝負を挑む為駆け寄った。

「遠藤先生、Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます。試験^{サモン}召喚!」

「くっ! 近衛部隊か!」

まだ教室に残っていた根本君の近衛部隊がその行く手を塞ぐ。

僕らと根本君の距離は20メートル程度。Bクラスの教室の広さ
のせいで随分距離がある。

「は、ははっ。驚かせやがって! 残念だったな! お前らの奇襲
は失敗だ!」

取り繕うかのように僕らを笑う根本恭二。

すでに僕らはまわりを近衛部隊に完全に包囲されている。ここか
ら抜け出す術はない。だが、目的は達した。

僕は笑う。

その様子を見て根本君が眉をひそめる。

瞬間、

ダン、ダンッ！

と、窓から人が二人飛びこんできた。

出入り口を人で埋め尽くされ、四月とは思えないほどの熱気がこもった教室。暑さゆえに窓はすべて全開となっている。

そこから突如現れた生徒と教師、二人分の着地音が教室に響き渡る。

屋上からロープを使って二人の人影が飛びこみ、根本恭二の前に降り立った。

一人は体育の大島先生。

体育教師であるが故の並はずれた行動力。それが保健体育の教科の特性だった。

そして、もう一人。

「…… Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリーニイーツ！！」

雄二が本隊を引きつけ、僕らが近衛部隊を引きつけたので丸裸になった根本恭二。もはや逃げ場も、守るモノもない。

「^{サモン}試獣召喚」

『 Fクラス	土屋康太	V S	Bクラス	根本恭二
保健体育	4 4 1点	V S	2 0 3点	
』				

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、 Bクラス戦は終結した。

「落し物は落とし主に、っと」

僕は先ほど取り返した姫路さんの手紙を彼女の鞆の中に放り込む。僕は無事根本君から手紙を（彼の制服ごと）奪い返した。根本君はそれで女子の制服を着る事になっていたが、自業自得。むしろ殴らないだけ感謝してほしい。

桂馬は先ほど一言も口をきいてくれない。

拳が痛いから、ではなくおそらくゲームを没収されたからだろう。もつとも、桂馬に言われてゲームは常に複数所持しているのですからに新しいPFPを渡したのだが、そういう問題ではないらしい。

「吉井君！」

「ふえっ！？」

背後から声をかけられて不覚にも間抜けな声をだしてしまった。

なんかすごく恥ずかしい。

「な、なに？」

慌てて振り向く。そこには姫路さんがいた。

「……吉井君」

目が潤んでいる。今日の姫路さんは泣き顔ばかりだ。

「ど、どうかした？」

鞆を勝手にいじっていたのを見られたのだろうか？ だとすると怒っているのかもしれない。

だが、慌てる僕にあるうことが姫路さんは抱きついてきた。

「ほわあああつと！」

「ありがとうございます……！ わ、私、どうしたらいいか、わかなくて……！」

どうしていいかわからないのは僕の方なんですけど！？ これはあれか？ 新しいトラップか？

だとすると、どこかにムツツリーニが隠れているのかもしれない。『ここはかつこよくしめろ。それで許してやる』

え？ カッコよくってどうやって？

『これみたいに』

桂馬が指差した物。

それは桂馬が持っているゲーム。

こいつ。間違いなく仕返しをしようとしてやがる。

だが、僕の手は反射的に動いてしまっていた。

僕は姫路さんを抱きしめる。

「大丈夫だよ。もう、大丈夫だから」

姫路さんありがとうございます、を何度も繰り返していた。

やってもうた……！

僕のバカ！ 何で桂馬の要求に従ってんだよ！ 姫路さんは雄二の事が好きなのに！

もちろん、そうしたい気持ちがあったとは言わないけど、でもやっぱり恥ずかしい。

姫路さんも落ち着くと、どういう行動を取っていたのか理解できたよつで頬を赤くして急いで帰ってしまった。

『リアル
現実で抱きしめてもつまらんな』

今すぐ殺してやる。降りて来やがれ。

『嫌だ』

ちくしょーっ！！

やっぱり桂馬はゲームの世界の住人だった。

FLAG 6 '0 (後書き)

明久「やっと僕の召喚獣がでてきたね」

桂馬「島田のもな」

ネコ「いやあ、尺の都合上、なかなかだせなくて」

明久「そこはがんばろうよ!」

ネコ「ぶっちゃけ、めんどかった!」

明久「ぶっちゃけないでよ!」

ネコ「次で一巻の内容が終わる、かどうかはわかりませんが次も頑張ります!」

明久「あれ、僕の事無視? そして、桂馬は参加拒否!?」

桂馬「うるさい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7955v/>

バカとテストと落とし神

2011年10月6日03時29分発行